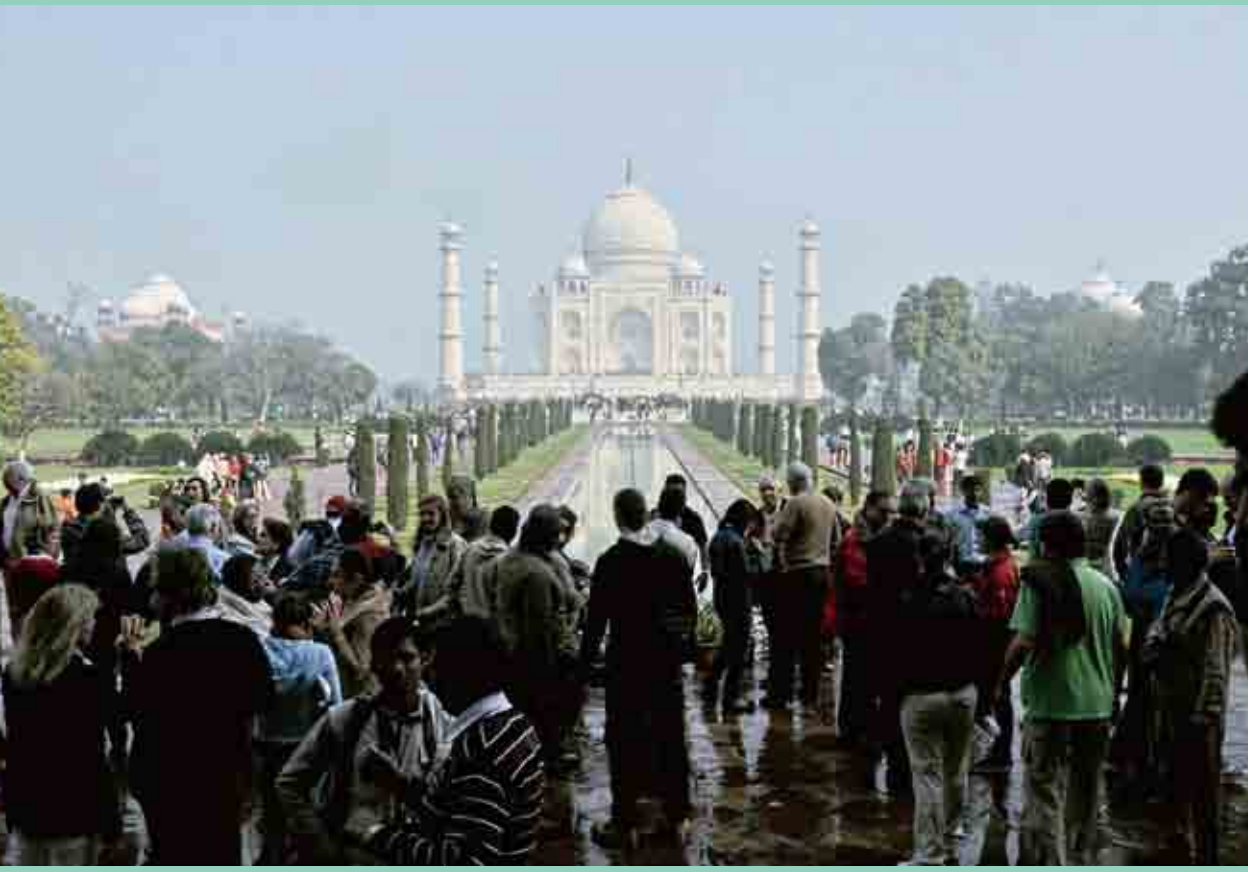
2013年12月20日 第506号（隔月発行）

アジアの友
The Asia-no Tomo

12-1
DECEMBER-JANUARY
2013-2014

（学）ABK学館日本語学校設立記念座談会
アジアにおける日本留学の意味を考える
「生誕百十一周年記念 穂積五一先生を偲ぶ会」開かれる



本誌は公益財団法人東芝国際交流財団の助成を得て作成されました

ABK焼き肉忘年会開催！

ABK 年末恒例行事の「焼き肉忘年会」が今年も 12 月 13 日金曜日にアジア文化会館地下ホールにて開催されました。用意された大量の肉と野菜は、たくさんの参加者の笑顔の中に消えていきました～

アジアの友

2013年12月−2014年1月号 第506号

目　次

2 二〇一四年新春のご挨拶　小木曽 友

巻 頭
4 （学）ABK 学館日本語学校設立記念座談会
「アジアにおける日本留学の意味を考える」

報 告
31 「生誕百十一周年記念　穂積五一先生を偲ぶ会」開かれる

37 TPA が国際交流基金賞を受賞

Interview
38 わたしたち、だから日本に留学しました！
何 泗杰さん（Mr. Clinton Ho Chye Keat）
林 龍安さん（Mr. Lim Loong Ann）

コラム
40 泰日工業大学 奮闘記（第３回）　亀島啓喜

報 告
42 ABK 同窓生募金寄付者芳名録（2010.6 - 2013.7）

知友会通信
48 イベント情報

MEMBERS
48 ご入会、ご寄付のご報告（2013 年 10 月、11 月）

＜表紙＞　タージ・マハル（インド・アーグラ）
<Photo by Ranganathan Mulvadi R>

二〇一四年

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

学校法人 ABK 学館日本語学校は本年（2014 年）4 月 1 日、開校いたします。また財団法人アジア学生文化協会は本年 4 月 1 日、公益財団法人として新たに発足する予定です。50 年余の風雪に耐えてきた ABK ＝アジア学生文化協会は、また次ぎの 50 年に向けて、新たな歩みを開始いたしました。私たちは、ここで ABK 創設の原点に立ち返り、創立者穂積五一先生の理想（穂積精神）を改めて噛みしめたいと思います。著作の中から穂積先生の言説を二節引用します。

アジアの若い人は、誰でも、すぐ通じ合ふ眼をもってゐる。その眼は、永い文化のつながりを思ひ起させる。同じ祖先だったのではないかとさへ思はれて来る。

戦後独立した国の人は、新鮮な民族のほこりをもち、戦争のお陰で独立できたと、日本に感謝する人もゐる。戦禍をあびた国のひとは、さうはいかない。心のうづきを包んで、日本の生活を送り、勉学にはげんでゐるやうに思はれる。これらの内に、きびしく日本のあり方が指示されてゐるやうに思ふ。私達は、アジアに与へた戦禍を、もう忘れてゐはしないか。アジアの心を見失ってゐはしないか。いや、日本を見失ってゐるのではないか。

私達は、何よりも清くおほらかで誠実な日本人にたちかへるときではあるまいか。科学とともに深めて限りない私達の人間性を探求すべきときであると思ふ。学んで行ひ、行って学ぶ。その努力のなかで、赤裸な人間が自得するものこそ、いのちある普遍性といひ得よう。これこそ、さまざまの風俗習慣宗教思想のすべてと融和し、かたくアジアと結び、ひろく世界に通じうるものと思はれる。和し

新春のご挨拶

財団法人 アジア学生文化協会
理事長　小木曽　友

て同ぜず、変ることのない友愛が、ここにはじめて生れよう。学寮（新星学寮）は、これまで、このやうな日本人をめざしてきた。やがて完成される会館も、このやうな内容をもちたいと思ふ。

（原文のまま、『内観録　穂積五一遺稿』51、52頁、1960年）

このたび、私たちアジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国の青年学徒は、アジア文化会館における数年間の共同生活を通じて、すべての個人すべての民族の自主と平等の原則を実証しながら、相互連帯の意識をつよめ、ここに、内よりの自発的意欲をもって、「アジア文化会館同窓会」を結成することになりました。

従って、私たち同窓会は、自己の充実を通じて民族の発展に寄与するとともに、ひろく、アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどに於ける新興諸国の向上に裨益せんとするものであり、そのことは、同時に、全世界の平和に通ずるという信念とかがやかしい理想にあふれ、それを成就しようとする青年の活力と想像力に満ちたものと言えましょう。

私たちは、このような青年の内よりの理想から生まれる創造的活力が、一燈やがて万燈となる如く、ひろく、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国の人の心にひろまることを冀い、そのための撓まぬ努力を重ねることをここに誓うものであります。

（1964年11月7日、アジア文化会館同窓会発会式における挨拶）

本年も内外関係者の皆様の一層のご支援・ご鞭撻を心からお願い申し上げます。

（学）ABK 学館日本語学校設立記念座談会
「アジアにおける日本留学の意味を考える」

前号でお伝えした 2013 年 10 月 26 日開催の「(学)ABK 学館日本語学校設立記念式典」の後に、学校設立を記念した座談会「アジアにおける日本留学の意味を考える」が（公財）東芝国際交流財団様のご後援を得て行われました。座談会には様々な分野で活躍する 13 名の元日本留学生・研修生の方々にご出席いただき、それぞれが思う日本留学の意味についてお話しいただきました。

司会　これから学校法人 ABK 学館日本語学校設立記念座談会に入らせていただきます。先ほどの記念式典でもお話がありましたが、今年来日する日本語学校生はベトナム、ネパールを除いては減少傾向にあります。留学生の減少にはいろいろな理由があるかと思いますが、一つには近年アジアの国々が経済発展し、わざわざ日本に留学する必要がなくなった為なのか、あるいは日本が長らく停滞していた中で元気を失って魅力がなくなっている為なのか、東日本大震災と原発事故の影響なのか、近年の領土問題で近隣諸国と問題を抱えている為なのか等々、留学生の動向を見ていろいろ考える次第です。

数年前のことですが、東南アジアに暮らす日本人や元日本留学生から、今アジアから日本を見ると沈んで見えると言われ、愕然としたことを思い出します。その後、東日本大震災が勃発し、そして福島の原発事故。こういった日本をとりまく厳しい状況が留学生の減少に多大に影響していることは間違いないと思います。こうした状況を踏まえ、それでも日本はまだ留学先として魅力があるのか、アジアは現在の日本をどう見ているのか、そして、日本をアジアか

らの留学先として子供に、後輩に薦める価値があるのか等々、元留学生である皆様方からお伺いいたしたいと思っています。

今回式典に海外からご出席してくださいました皆様方は、だいぶ前に日本留学を終え現在自国で活躍されている方、或いは海外で活躍されている方々ですが、日本留学後、ご自身の日本留学、或いは友人の日本留学を返り見ていただき、日本留学がこれまでの自分の人生の中でどのように位置づけられているのか、メリット、デメリットなどをお話しいただけたらと思います。そして、皆様のご発言の中から、日本留学の今後を探れればと思っています。

今回は、海外から本日の式典に参列された方々を中心に据え、更に国のバラエティも考え在日の OB・OG にもご参加をお願いいたしました。どうか率直なご意見をお願いいたします。

お話は言いっ放しになるかもしれませんが、日本政府が留学生をしっかり位置付け、留学生政策をより重視して、奨学金を充実させ、更に相手の国情等に合せ配分する等いろいろな形で、留学生の声を柔軟に政策に反映させて欲しいと思っています。

なお、今日の座談会は、公益財団法人東芝国際交流財団さんにご後援をいただいております。この場を借りお礼申し上げます。

それでは、ABK の設立当初より ABK 事業に係わってきました財団法人アジ学生文化協会小木曽理事長にモデレーターになっていただき始めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

小木曽　というわけで、これは座談会ですので何か一つのテーマ、今、司会が言われたような大きなテーマに関することであれば何でもいいですから、放談会と考えて、自由にご発言下さい。60年代、70年代の留学生の方もいらっしゃるし、最近の方もいらっしゃいますので、長老格の一番古い方からご発言いただこうと思います。それでは、タイのスポンさん、先ほど式典でご挨拶されましたが、そのことも含め何でも結構ですので、お話し下さい。

スポン　タイのスポンと申します。現在は、泰日工業大学の理事長をやっております。

実は、私が日本に留学したことは半分偶然といってもいいんですね。文部省の奨学金試験を日本大使館に行って受け、それに受かってどうしようかとずいぶん考えましたが、思い切って日本に留学しました。そして、今は日本に留学して良かったと思っています。タイでは、その時代は欧米へ留学する人が多かったんです。だから、僕の先生も日本に行くのはちょっと待てと、欧米の方にもいろいろな奨学金があるから、そちらに行ったらどうかと言うんです。というのは、僕は高校時代大変成績が良く、全国の統一試験で2番の成績をとっていましたので、先生は、おまえが日本に行くのはもったいないと言われたんです。実は、その時代は日本留学はあまりタイでは高く評価されていなかったんです。それだけではなく、帰国してからもそうです。帰国してからも欧米の留学生よりも評価が低い。東大卒といってもあまり価値がない。泰日

Supong Chayutsahakij

1961年来日。1968年東京大学工学部電気工学科修士課程卒業。現在、泰日工業大学（TNI）理事長、泰日経済技術振興協会（TPA）顧問（元会長）、タイ国元日本留学生協会顧問（元会長）、タイ国ABK-AOTS同窓会顧問（元会長）、バンコク高速道路株式会社副会長、バンコクメトロ（地下鉄）株式会社副会長、バンコクメトロネットワーク株式会社会長他

経済技術振興協会を設立した理由はいろいろありますが、僕としてはこのことはその一つです。

当時は、タイの社会で日本留学生が帰国後高く評価されない。国の人事院でも必ず二段か三段くらい下のランク付けをされるわけです。当時は偉くなっている先輩があまりいませんでしたからしょうがない。一番出世していたのはソンマイさん（元大蔵大臣、当時はタイ国中央銀行副総裁）くらいで、偉くなっている人の数がタイ社会で絶対的に少ない。だからしょうがないんですね。我々日本留学生も実力を示すために何かやってみせないと評価してもらえないと思いました。悔しがっていてもしょうがないので、日本留学生が団結して泰日経済技術振興協会でいろいろな活動をやって、実力を見せてやろうということが一つの理由です。もちろんほかの理由もいろいろありました。私は日本政府奨学金をもらっていましたから謝恩の気持ちもあり、当時のタイ日関係を見てなんとか両国を友好的な関係にしないといけないという思いもありました。同時にタイではその頃工業化が始まっていましたので、工学部卒の僕は、タイの工業化の進展のために何かやらなければいけないとも思っていました。

実は、僕は日本留学にあたり最初は工学部ではなく、医学部で勉強するということで奨学金をもらい来日したんです。それを来日後、僕は文部省に行って、工学部に切り替えたんです。日本の医学は世界を見渡してもどこにも負けないのに、なぜそれを工学に変えるのか、僕自身もうまく説明できませんでした。そして工学部を卒業し帰国してから何ができるのかも、実はよくわからなかったのです。ただ、修士課程の時に住居をアジア文化会館（ABK）に移しましたが、当時ABKに事務所があったAOTS(Association for Overseas Technical Scholarship; 財団法人海外技術者研修協会、現HIDA)の事業に触れて大変興味を持ちました。AOTS

は発展途上国から技術研修生を受け入れていましたが、タイからもたくさんの研修生が来日し、25人、30人くらいのグループが一緒に来日して研修を受けていました。僕はABKに来てから彼らのタイ語の通訳を頼まれていました。その研修生たちは、一年か半年、日本で研修を受けて帰国してから一つの大きな工場を立ち上げるということを聞き、これは本当にいい勉強だなあと思いました。実践で、現場で学ぶことですね。いくら理論を学んでもそれだけではダメだと思いました。例えば僕は電機を勉強しましたが、小さなモーターひとつも作れませんでしたから。だからこういった実習などをもっと大事にしないといけないんじゃないかなと思い、AOTSのやり方をタイでもやったらどうかと思いました。

そのアイディアについて、先輩や仲間など工学を学んだ人たちが集まっていろいろ議論しました。そして、穂積先生にいろいろ相談しました。初めは、できればタイでも大きな訓練学校か何かをつくったらどうかとか、先生にいろいろ相談したんです。そうして、1974年にタイにTPA〔Technology Promotion Association (Thailand –Japan)；泰日経済技術振興協会〕ができ、今に至っています。そして、2007年に泰日工業大学をつくり、長年の夢を実現しました。

今考えてみるとTPAはタイが必要とする技術を日本から学び広めてゆくところですが、それには、まず言葉が重要な役割を果たしました。いくら良い技術があっても言葉がよくわからず、意思の疎通が出来なかったら十分理解できませんね。さらに文化。技術には文化的要素も当然含まれています。僕は理科系であまりそういった問題を考えていなかったのですが、実際に事業をやってみると言葉や文化は重要で、そうしたことがわからないとうまくいかない。だからそれを理解し、認識した上で、日本の方々ともうまくコミュニケーションをとりながら、TPAはいろいろ試み、手直ししながら今日までやってきました。トライ＆エラーですね。やって間違ってまたやり直す、何回も繰り返すの連続でした。

今、いろいろな人がTPAのことをODAの成功事例だと言いますが、たくさん苦労しました。バカみたいなこともやってましたが、でもものすごくいい経験になりました。最近ミャンマーから大学を創りたい。また、TPAのようなものを作りたいという話があります。できることはなんでもお手伝いしたいと思っています。ミャンマーの元日本留学生協会（MAJA）のミンウェイ会長は僕の友人です。ものすごく熱心で、今時々タイに来ていろいろ勉強しています。僕らは30年から40年かかってここまで来ましたが、ミャンマーは10年以内に成功するよう僕らは全面的に協力して、手伝いたいと思っています。

このように、日本からは技術だけでなく、文化的交流や人の関係、日本で培った人的ネットワークを大事にして広げていったら大きな効果が出るのではないかと思います。

小木曽　ありがとうございました。次にど

なたかと思い年代を調べましたら、ベトナムのミンさんなものですから、ぜひミンさんに。ミンさんはこれまで自由にベトナムのために活動されてきて沢山ご意見があると思います。

ミン　ベトナムのミンです。今日はたくさんの方々が見えてますので、なるべくみなさんがお話できるように私もがんばって短く喋らせていただきます。まずですね、私が新星学寮に入ってから四十数年になりました。すごく長く日本と付き合って参りました。今日は式典でたくさんの先生方から日本語学校のベトナム人留学生が最近増えているということと、一方で中国と韓国の留学生が減少したといったお話がありましたが、そこをもう少し別の観点から申し上げますと、例えば50年前、半世紀前は日本は脱アジアでしたね。しかし今はアジアに戻ってきたわけです。そのことは考えてみますとものすごく遅かったと思います。

1945年には日本とベトナムの間に多少の戦争があり、歴史的には日本はベトナムを一時的には占領しました。しかし戦後日本は、まだアジアが眠っている時に走り出して先進国になって、10年間、20年間、そして1970年にはアジアで初めてエキスポを行うことが出来ました。それは、一言で言いますと、アジアの中の先進国ですね。それで、ベトナム人は日本のことについてどう思っているのかといいますと、昔も今も“日本は発展している国”という印象を持っています。

ベトナムは元々が日本と文化的にも割合に近いですね。お箸を使い、宗教も仏教の影響があり、食事もいろいろ工夫する･･･。ベトナム人の多くは日本のことを良い国と思っています。けれども実際は日本はやはり離れたところにあります。なぜならベトナムは、日本と経済的な距離感が非常に大きいですね。だからベトナムの学生は、日本で勉強したくても実際は非常に難しいという問題があります。

日本はもっとアジアの中に戻り、アジアの国々と共に発展していけば、ベトナム人にとって大変難しい日本語も徐々に親しめるようになるのではないかと思います。具体的に申し上げますと、ベトナム人がもし日本企業で仕事をする、あるいは日本人との交流などで日本語、日本文化に接する機会が増えれば、きっと日本語にも徐々に親近感が持てるようになるのではと思います。ですから今後、ベトナムとのいろいろな形の交流により日本のことを紹介し、理解してもらうことが必要だと思います。

ここで私がもう一つ強調したいのは、東日本大震災と原発事故事のことです。原発事故の後、すごく怖くてたくさんの留学生が日本から離れましたけど、ベトナム人はほとんど離れませんでした。たぶん、日本国民の協調性と心の優しさに感心して、気持ちを分かち合いたかったからでしょう。

ベトナム国内のベトナム人は日本の東日本大震災のことと原発事故のことに対しても、日本の国民のことを非常に尊敬しております。なぜならば、最も厳しい状況に置かれた被災者は、お互い助け合い、お互い命を守り、そのようなソフト面の価値感が

世界に発信されたからですね。だから、私の家族、友人、知り合いの方々、そして多くのベトナム人は東日本大震災と原発事故により日本人のことを尊敬するだけではなく、もっともっと日本についていろんなことを知りたがり、そして原発のことも批判するだけでなく、より優しく受け止めているのです。

ですからこうしたタイミングに、日本のことをもっとベトナムに紹介すれば良いと思います。そして、日本での勉強を呼びかけることを、現地と手を組んで、留学を実現するためには実際どのような方法があるのかなどを伝えたらよいのではないでしょうか。私もベトナム人が日本に留学することは非常にいいのではないかと思います。私自身大変な時代でしたが、結果として日本留学は良かったと思います。

ベトナム人がよく言いますのは、日本人は勤勉だとか、がんばっているとか、賢いとか、いろいろ日本人のことを褒めています。でも実際日本に長く住んでいますと、日本人はそれ以上に勤勉でがんばっているように思います。だから現在このような国家になっているんですね。また、日本人は言葉ではあまり表現しませんね。言葉ではなく行動で示します。実際日本はどのように戦後立ち直ったのか。コツコツとモノづくりをしてきましたね。そこが違うんです。例えば現在の IT の時代は直ぐにハードの部分とかソフトの部分を手に入れて、どこの国でも工場がつくれる時代ですが、しかしそれができるまでに誰がどのように苦労してそのハードを作っているのか、理解していないんですね。自分達の努力が足りません。例えば日本で完成された一つのハードはベトナムとか中国とか韓国とかマレーシアとか、どこにでもすぐに移すことが出来るんでが、実はハードが出来るまでのプロセスが大切なんですね。やはりそういうものを作る人が大事だと思っています。私が強調したいのはモノづくり、モノを作る人間だったらそのモノの価値がよくわかるということです。だからアジアの国もそういう意味から日本から学ばなければならない、勉強しなければならないんです。やは

Dao Thi Minh

1967年来日。拓殖大学・東京教育大学を卒業後帰国し、1986年日本に戻り、現在は、日本とベトナムで会社経営、Fuji教育基金をつくりベトナムの子供達の教育支援を行っている

Beh Chor Kim

1978年来日。東京医科歯科大学卒業後、日本で実習後帰国。現在はクアラルンプールで病院経営・院長

りコツコツと勉強することが大切ですね。

現在、日本の政府はビザでも以前よりもっとオープンにしていますね。だからたぶんベトナム人留学生がたくさん日本に来ることができるのだと思います。しかし、今日の式典で、日本語教育振興協会の佐藤先生がお話ししましたように、やはり留学は経済の問題が大きいと思います。ですから財政的な問題で、安心して勉強できるかどうかが今重要な課題としてあると思います。そこが解決できないと、みなさんせっかく日本に来ても途中でギブアップして、勉強を止めてしまうのではないかと心配しています。ありがとうございます。

小木曽　それでは国が変わって、マレーシアのベー・チョー・キム先生お願いします。

ベー　マレーシアのベー・チョウ・キムです。この課題はあまりにも広すぎますので、少し絞って話します。

私は日本に留学して、医学を選んだんですが、その当時は、日本で医学を勉強する留学生はほとんどいなくて、富士山に登るバカと同じで、日本で医学を勉強したバカは帰国しても医師の資格は認められない、仕事もできないんじゃないかと言われました。それにも関わらず日本に来まして、結果としてはちゃんとした教育を受けられ、その上もう一つの言葉を覚えることができました。そして、自分の国に戻ったら学位に問題はありましけど、それはうまく政府に働き掛けて認定してもらえるようになりました。そして、十数年日本にいた成果として、マレーシアに戻った時にちょうど日本の企業がたくさんマレーシアに進出して来ている時期であり、日本人の家族もたくさん来ていまして、日本語ができる医者も必要とされていましたが非常に少なかったんです。そこで、上手い具合に私が日本人駐在員たちの「Japan Medical Clinic」という小さいクリニックをはじめまして、今日まで飯が食えるようになりました。昔は大変日本人に世話になりましたけど、今は逆に日本人のお世話をしている立場になりました。

また、日本で医学を学んだこともありまして、日本の大学や病院、関連施設などに医療関係の協力先もできまして、そうした

ところのトップの人たちの信頼を受けやすく、今は例えば日本で非常に進んでいる癌の免疫治療、末期癌に対しても非常に有効な治療法の研究が日本では進んでいますが、そこの先生と協力しあって、今、マレーシアでは初めての日本の免疫癌治療の拠点として活動を始めております。そして東南アジアの癌の患者さんにそういう日本の治療を提供して、また同時に難しい症例は日本に送る、いわゆる日本が今唱えているメディカルツアーリズムにも参加をしているわけです。

私の観点から言うと、日本留学はそんな意味でしょうか。息子はイギリスの大学に行き一応医者になってもらいましたが、しかしうちの跡継ぎをする、日本人の患者さんの世話をするのに日本語が出来ないと全然意味がありませんので、今度は語学留学ですね、大学を出てから日本語をゼロから勉強するということで、今ABKの日本語学校の世話になっているところでございます。以上でございます。

小木曽　ではまた今度国が変わりまして、中国の計宇生（けいうせい）さんにお願いします。計さんは中国と日本の留学生の交流が始まったごく初期に来日された方です。

計　ご紹介いただきました中国から参りました計宇生と申します。私は中国政府派遣の第一期の学部留学生として1980年代の初め頃に日本に来ました。ご存知のようにちょうどその頃中国は改革開放政策が進められて、外国に留学生を派遣するようになったんですが、その中の日本組といいますか、それで来たのですが、私以外にも一緒に学部生が100人来て、さらに訪問学者が数百人一緒に来ました。中国から日本にたくさんの留学生が来るため宿舎の問題などがいろいろありまして、ABKには大森寮をはじめそういった宿舎の面でいろいろと助けていただき、私も6年間くらいABKにいました。

大学院を卒業した後、今は国立情報学研究所に勤めています。国立情報学研究所の状況を申し上げますと、実は留学生が多いですね。研究所なので大学の学部というのはありませんから、外から大学院生を受け入れるのですが、アジアからの学生がほとんどです。中国が減っているといっても、私のところにも今6名中国からの大学院生が来ていて、あとはタイとかベトナムからも来ています。他に短期で研修に来ているインターン生にはアジアだけではなく、ヨーロッパからも来ています。日本留学というのはどういう意味があるのかということなのですが、私と同じ時期に来ている留学生の帰国後の状況を見ると、けっこうみなさん活躍しているかなと思います。例えば大森寮とかABKでお世話になった人も含めて、日本に留学した人で今大学の学長になったり、副学長になったりとか、または国の研究基金管理機関の責任者になったりとか、そういう人がけっこういますので、そういったことでも日本留学が大変役に立っているんだなと思います。

日本と欧米を比べるといろいろ違うのですが、先程ベトナムのミンさんが言ってい

計 宇生

1980年来日。東京大学入学、その後修士・博士課程に進学。現在、国立情報学研究所教授

たように、日本に来て技術やモノづくりの考え方を勉強したりということも、もちろんありますし、同じアジア人なのでもっとより深く知りあえるということがあるかなと思います。そういう意味でより大局的な考え方も養えるのかなと。文化の根幹に触れられて大局的な考え方が養えるのではないかなと思います。

今、日中関係がぎくしゃくしていますが、そういうことは政府とかマスコミに左右されやすいですが、やはりなんといっても一番大事なのは人と人の触れ合いなんですね。留学を通して、もちろん科学・技術を学ぶのは一つなんですが、人と人の相互理解をより深めていくこともすごく大きな意味を持つのではないかなと思っています。

小木曽　先ほど計さんの話に出てきた大森寮というのは、その頃中国からたくさん留学生がいらっしゃるというのにアジア文化会館はいっぱいだし、なかなか他に宿舎はないというので、穂積先生が東京中探して、大森駅の近くにあった会社の寮を借り上げて作ったんです。その時、人手が足りないので、ABKの職員が家族総動員で掃除をやったり、食事を作ったりしたんですが、たまたま計さんたちのグループが到着した時に学生の方たちにも食事の当番をしていただこうということで、これは新星学寮の精神なんですが、たまたま私が職員の方の当番だったので、学生の方の当番だった計さんと２人で買い出しに行こうと言って、近くのスーパーに行きました。私は普段買い物なんてしたことがないものですから、何か買おうとすると計さんが「小木曽さんダメ、それは高い」とか、来たばかりなのに日本の事情をものすごく詳しくてね。1年くらい長春で日本語を勉強されたそうですが、日本語だけじゃなくて日本のあらゆることを勉強して来られたんですね。本当に素晴らしい教育で・・。それで、計さんに教えられながら食事を作ったことを今思い出しました。

それでは次にシンガポール出身のフー・チュウ・ウェイさん。

フー　シンガポール出身のフー・チュー・ウェイです。私は1983年に来日して、今

数えてみると、日本と知り合ってもうすでに30年近く経ちました。卒業後2年間はシンガポールのテレビ局に勤めていたのですが、そのあと結婚など個人事情があり、28年間日本に住んでいます。18歳で来日して以来、自分の国よりも日本と付き合った時間のほうが長くなりました。さらに、日本で二人の子供を育てたので、日本とは切りたくても切れない縁があります。

職業はジャーナリストである私ですが、日本について発信するときに、常に自分が「親日派」か「反日派」かを自問しています。でも、親日でもなく反日でもなく、日本を知ることが一番大事だと思って今の仕事を続けています。

もうすぐ50歳になる私ですが、考えてみれば、日本で暮らし、勉強して良かったと思います。特に、留学中アジア文化会館に入寮したことには意味があります。留学生の時代に、日常、日本の社会に不満があるとき、会館は私が唯一本音を語れる場所でした。戦争の歴史、そして私自身が祖母の反対にもかかわらず、日本に留学したことのすべてをありのままに語れるようになりました。欧米留学ではなく、日本にいることによってこの問題を深く考えています。アジア人としてアジアを知らないで生きるのは苦しいと思います。このような視点を持てたことについては、日本留学に感謝しなければなりません。日本留学をしなければ、私は多分日本のことをここまで考えることはありませんでした。

日本とアジアの間にはまだ解決していない問題が多く、それらがいかにアジアの未来に影響していくのかを来日当初から考えていました。30年近く経った今、残念ながら日本と中国あるいは韓国はまだ歴史問題で仲直りはできていません。残念なことに、日本ではアジアからの留学生の本当の声に耳を傾けることができるような場所はあまりにも少なかったのではないかと思います。

私は今後もアジア諸国から多くの学生が日本に留学して欲しいと思います。それは日本に良い印象を持つのか、悪い印象を持つのかに関わらず、日本を知るために大変役に立つことです。そして、日本の中で受けた不平等な経験、それに対する不満も勉

Foo Choo Wei

1983年来日。日本大学芸術学部 / 東京大学修士課程卒。現在、Singapore Press Holding 日本特派員

Khin Khin Htwe

ヤンゴン外国語大学卒業後、2006年来日。（財）アジア学生文化協会日本語コース卒業後、中央大学商学部へ進学、2008年“学生によるミャンマー．サイクロン復興支援会”発起人として活動し、2011年株式会社タカショー勤務

強の一つと思います。

小木曽　ありがとうございます。それでは今度はぐんと若返って、ミャンマーのキンキンさんお願いします。キンキンさんはABKの日本語学校を卒業されてから大学を出て、今は日本の企業に勤められておられます。和歌山県からわざわざこのためにおいでいただきました。

キンキン　この座談会に呼ばれること自体が大変おこがましいと言いますか、一番歳も若いし、経験も少ないし、でもミャンマーという生れた国だけで選ばれて何か申し訳ない気がします。私が日本に留学したというのも、たまたま日本語学校の先生にこの奨学金の試験を受けてみてと言われて、その試験にたまたま受かって、岩國育英財団から奨学金をもらって5年間日本に留学することになったわけです。いざ日本に来てみると、周りにミャンマー語を喋れる人はあまりいないし、英語も通じないし、そうしたら日本語しかないということで、5年間がんばって日本語でみんなとコミュニケーションをとりました。今、日本に来て8年目で日本の会社で働いているんですが、私が日本に留学して一番良かったことは、学生時代にミャンマーで大型サイクロンの災害があった時に募金活動ができたということです。その時にABKは全面的に協力してくれて、自分は自信がなかったのですが、ABKの職員はみんな「笑顔でやってみればできるよ」と励ましてくれました。そしていろいろ応援してくれて協力してくれたのですが、このことは自分の国のために何かをやったという達成感が得られ、日本に留学して良かったと思えた大きな出来事でした。

ミャンマーから当時留学するというのはお金の面も日本語の面もすごく難しかったです。ミャンマーは1943年のビルマ建国の時日本軍とともにイギリスと戦ったので、日本語を勉強する人が当時たくさんいたのではないかと思うんですが、ビジネスができるレベルまでの日本語はすごく難し

い。ミャンマーにはそもそも漢字は無いので、日本語が理解できたとしても、日本人の考え方、文化などを学ぶのは簡単ではない。それは日本に留学に行く時に違和感を持つところだと思います。チャンスがあっても自信が持てないとか行くのが怖いというのも大きな問題だと思います。

お金の面で奨学金などを出して行かせるとしても、ミャンマー人から見たら日本語を勉強するのに時間がかかるのが難点なのかなと最近特に感じています。日本政府が今後ミャンマー人留学生たちを増やそうという考えを持っているようです。その前にミャンマーの現状を言いますと、ミャンマーは今政治が変わって世界の注目を浴びるようになってきているんですが、現状では日本の企業はまだ100社くらいしかありません。ミャンマーの人たちに日本語が出来て英語が出来たら、どこの企業で働きたいのかと聞くと、欧米の企業に行きたいと答える人が多いです。その次が日本、中国、韓国といったようにみんなが目指すランクというのがあって、そうするとなんで日本は先進国なのにランクが下かと思うと、日本企業は給料が安いのと、日本人はすごく勤勉なので、アジアの人たちも勤勉でしょ、もっと働きなさいということで労働時間が長いのと、それに対してのメリットが少ない。現場でもそういう日本的な考え方を押し付けるからやりにくいというのが現実の問題としてあります。そうすると、日本に留学して帰国したとしても他の企業で働いている人たちより給料が安いとなると、せっかく難しい日本語を勉強してきたのに本当に悲しいことですね。留学先としては欧米に行って英語を勉強したほうが効率いいし、良い選択ではないかというのがすごくあって、そういう面なども日本政府や企業はもう少し考えて、その国に合わせて周りの企業などを見て競争力をつけてもらい、帰国した留学生たちが働ける経済的な整備を先にしないといけないのかなと思います。

小木曽　ありがとうございました。これで各国の方々に一通りご発言いただきましたので、今度はまたマレーシアに戻って、ウン・キム・チャイさんお願いできますか。

ウン　マレーシアのウン・キム・チャイと申します。私は日本に留学してから仕事でも家庭事情でも日本と深い関係を持っています。大学では制御工学を専攻し、卒業してから日本の企業に入社し18年間勤めました。会社での業務内容は好きな機械に関する仕事です。1999年に帰国しロボットのビジネスに携わっています。今まで好きな学科を勉強することが出来、好きな仕事をして、また今好きなロボットビジネスをやっているという感じです。家庭において、私の息子と娘は日本で生れました。息子は今日本に住んでいて、日本語の楽曲の作曲・作詞をやっています。娘は元々日本に留学する予定でしたが、同時にカナダの大学も申込んでカルガリ大学に合格しました。これから考古学の勉強をする予定です。日本とカナダとどちらにするかということで私に相談に来ましたが、私は気持ちの上では

Ng Kim Chai
1977年来日。東京工業大学卒業後日本で就職。現在は、マレーシアのロボット商社 Invendo Sdn. Bhd. のディレクター

日本に留学して欲しいと思いました。しかし、本人はどうかというと、あまりよく分かりませんでした。私は考えて、考えた末に学部は英語圏で学んで、そのあと日本に留学するというアドバイスをしてカナダに決めました。日本の大学院なら奨学金がたくさんあるし、私も経済的に少し楽になります。私の仕事と家庭は実に日本といろいろな面で深く関わっています。まずこのくらいでよろしいですか。

小木曽　ありがとうございました。それではまた国が変わって、今ウンさんの息子さんが音楽のことをやってらっしゃるというお話だったんですけれど、ABKの日本語学校を出た後、東京芸大の民族音楽科を出て、今現在、日本で民族音楽演奏家として活動していらっしゃるタイのカナンシンさんに、その楽しみと苦しみの両方を話していただきたいと思います。

カナンシン　みなさんこんにちは。タイから来ましたアドゥン・カナンシンと申します。今、肩書きは日本で唯一の音楽家・役者・翻訳、通訳・タイ語教師となっています。本当にまず最初にですね、今日千石駅から歩いてきて、見たことのない素晴らしい建物が目に入りました。看板を見たら新しい日本語学校校舎なので、凄く嬉しくて、関係者の小木曽さん、布施さんをはじめ工藤さんやみなさんに「おめでとうございます」と言いたいです。僕は1988年にここで勉強したんですけれど、こんなに立派な学校が出来てすごく嬉しかったです。

で、日本に来て、一口で言えば人生が変わりましたね。日本が僕の人生を変えたと言っていいですね。もちろん他の国に留学したことがないのでわからないのですが、日本は自分の人生を変えた国だとすごく思っています。よくよくなぜそう思うようになったのかを考えてみると、日本に来て、もっとタイ人になったなあと思ったんですね。留学の経験がある方には皆さんあるかもしれませんね。タイ人の自覚が出てきてよりタイ人になったんじゃないかなと思いますね。タイにいた時はタイの教育やタイのマスコミから与えられる情報など、いろんなものが自分に絡みつくようになってい

たのですが、日本に来て、それらを一個一個捨てていくような感じがするんですね。それでだんだんと自分は実はこういう人間なんだということがわかってきたような気がするんです。そういう意味では日本は自分の人生を変えた国なんじゃないかなと思いますね。

それで、大切なのはタイ人の自覚があって、よりタイ人になったことで、たぶんそれはこれから我々が、まあ自分は中年世代ですが、アジア人として生きていく上でとても大切なことなんじゃないかなと。アジア人になるにはまずタイ人にならないといけない。だからタイ人になれなければアジア人にもなれないと思うし、例えば英語、日本語をペラペラ話せても、タイ人の・・説明しにくいですけれど、タイ人しか持っていない考え方など、他の国の人と意見を言い合うことが出来る人間にならないといけないんじゃないかなと。これはとても大切な要素だと僕は思います。そういう意味で、日本は自分の人生を変えたんじゃないかなと思います。

ABKの思い出ですが、僕は今まで仕事をしてお金のことを考えたことがない人なんですね。だから本当に凄い苦しい時に小木曽さんに助けてもらったりとか、小木曽さんはすごい恩人なんですね。通帳の中が800円もない時代があって、それで銀行に行って「800円しかないのか！」と思って帰ったら、偶然小木曽さんに雪印の通訳の話が来ているのでやらないかと言われたんです。当時はバブルだったので、１日４万円もらえたんですね。１月半で百何十万円をもらいました。本当にありがとうございました。本当に助けてもらいました。小木曽さんはすごい恩人なんですよ。

で、日本留学の意味ですが、技術とか日本のいいところはいろいろあって、僕の場合たぶんいろんな日本のいいところを見てきましたが、一つ、女性が強いということについて最近気づいたんですね。家内が日本人だからということじゃなくて（笑）、他のアジアの国と比較しての話なんです。

Adul Kanansin

1988年来日。音楽家、役者、通訳翻訳者、タイ語教師。東京芸術大学修士課程音楽学専攻卒業。「アドゥンバンド」を主催するなど日本唯一のタイ人音楽家として幅広い音楽活動を展開する。近年は役者業にも進出し、「ダブルフェイス潜入捜査編」（TBS）他、ドラマ・映画に出演

中国、韓国、マレーシア…、タイもちょっとずつですが発展していますが、やはり日本の魅力の一つは女性が強いというのが他国と比較して凄いところなのではないかと思います。

僕はこの間、ネパール人の大学院生と話したのですが、彼女が研究した結果、日本の女性は他のアジアの女性に比べて、女性としての誇りを持っている人が多いそうです。もちろん見方によって変わるのかもしれませんが、僕自身、自分の肌で感じるのはやはり日本の女性は強いということです。

ではなぜそうなのかというと、それは日本の教育の力です。日本の女性は男性と平等の教育を受けられる。そしてそこから知識や価値観を学び交渉や駆け引きの能力をつけて、社会で活躍できるチャンスを得ます。結果、社会のバランスがとれて経済が活性化し国も豊かになる。早くから日本にはそうした構図があってアジアをリードする国になったのではないかと思うんです。タイを始め他のアジアの国々でも女性は活躍していますが、それはまだ一部の都会の女性だけです。だから留学生にとって同じアジアの国である日本の、そうした成熟した社会を体験することも、日本留学の意味なのではないかと思うんです。

小木曽　ありがとうございました。それではまたちょっと国が変わってマレーシアのフーさん、お願いできますか。フーさんは妹さんがABKのご出身ですよね。

フー　はい、ABKの四期生ですね。マレーシア出身で、今シンガポールに駐在しているフー・シャン・センでございます。シンガポールに派遣されたのは今から約14年前です。その前に日本の大学を出て、日本の会社に入ったのは1987年で、東京で3年ちょっと勤務して、その後香港に10年、それから今のシンガポールに14年目というような経歴でございます。本日の出席者には大先輩の方が多いですが、おそらくその中でも僕は留学生として大学を卒業してから、最初に入った会社に26年経ってもまだ勤めているという珍しい留学生でございます。まあいろいろな考え方がございますが、他の留学生がよその会社に転職したり、いろいろあった中で、いろんな辛抱をして今日まで来たというのが正直なところでございます。そこで、これまでの仕事の関係で経験した日本でのいろいろな出来事とか、外から見た日本について、僕なりに二つのことを取り上げたいと思います。

というのも、本日の記念式典の中でも話されていましたように、最近やはり日本への留学生がかなり減っているということについて、僕としては二つの問題提起をしたいと思います。というのは、一つ目は留学生が減るということを政府レベルで考えると、政府と政府のパイプ役を果たせるような留学生が非常に少なくなると思うからです。例えば今は日中とか日韓とか、あるいは中国と近隣諸国もそうですが、やはり以前のように留学生のパイプ役がたくさんいればどんな問題があってもお互いにコミュニケーションがとれると思います。例えば日本語で、また他の言葉でもコミュニケー

ションがとれることが非常に大事だと思っています。

ところで、今の日中、日韓のいろいろな問題を見ていると、なかなかうまくゆかない。なぜうまくコミュニケーションをとっていないのか不思議に思っています。一方でそうした状況があるのに、留学生が減っているということは大変まずいことだと思います。それで、これからどうやって日本留学の減少傾向を引き止めるかというのは非常に大事なことだと思っています。

もう一つ、僕は今シンガポールにおりまして、日本の本社から会社の経営を任されておりますが、今ASEANに現地法人が４箇所ございます。それらの会社経営の一部の責任も持たされております。しかし、他の日本の会社もうちの会社のように、実は何年か前からASEANとかアジアでのビジネスをもっと拡大されておりますが、そうした時に、会社にとって一番手っ取り早く、やりやすいのは元日本留学生を採用することだと思っております。タイとか、インドネシアとか、あるいはベトナム、ミャンマーとかの国もそうですが、やはり留学生のパイプ役がいてくれれば民間レベルで見るとビジネスの展開がある意味でスムーズにいけると思います。

ところが今、ASEANの中でこうした元日本留学生の採用をしようと思ってもなかなか適切な人材が見つからないのは、おそらくうちの会社だけではなく、他のたくさんの日系企業が抱えている問題でもあると思います。これは本当にそういった意味で、民間レベルで見ても日本への留学生の減少傾向というのは決していいことではないので、そういった意味でもこれから僕もシンガポールに戻って本日の記念式典などのことについて他の留学生にシェアしていきたいですし、これからもっと日本留学の意味などをいろいろな角度からプロモートしていきたいと思っています。みなさんもぜひそういった意味で日本留学についてもっと推進していって欲しいと思います。日本のためだけではなくて、自分の国にとっても非常に意義深いことでもあると考えています。以上簡単ですが、終わりといたします。

Foo Siang Seng

1978年来日。1983年高崎経済大学卒業、日本企業に就職。現在、Century Tokyo Leasing(Singapore)Pte. Ltd.取締役社長及びアセアン地域代表を兼任

小木曽　ありがとうございます。それではまたちょっと世代が若返って、ABKの日本語学校を終えて大学を出られてから、日本で企業を経営されている中国の尚捷（しょうかつ）さん、お願いします。

尚　中国の尚です。1991年から1年間、このABKの日本学校にいまして、その後大学に入り、卒業後は、僕はそのまま日本に残って会社を興して今に至っています。会社では、僕は普段は日本と中国を行ったり来たりしているんですが、今は半分は中国、半分は日本という感じです。日本人は600人くらいの社員がいて、中国には1000人くらいの社員がいますが、そういう意味でも普段は日本人なのか中国人なのかという考えはあまりなくて、かなりビジネスライクにいろんなことを考えています。

今日は久しぶりにABKにお呼びいただきました。一言で言うと、ABKはまず今でも思うんですが、自分が人生観を形成した原点かなと思ってます。中国から来まして、中国人ですが、中国人とは何かというのは、さっきカナンシンさんもおっしゃってましたが、ABKに来て1年間というのは僕にとっては再定義でした。自分は何ですかと。今まで考えた中国とは違うなと。中国語を喋れる華僑の方はいっぱいいらっしゃって、同じ文化背景があっても彼等は全然違うと。どう尊敬していくかとかですね、そういうこと、様々なことを考えさせられた時でしたね。その時できた友人で、ここで知り合った留学生母親運動のカナイさんという大宮に在住の方がいます。今はもう92か93歳ですが、この方とはそれ以来ずっと付き合っていて、うちの両親とも付き合っていただき、今でも親しくお付き合いをさせていただいています。いろいろあって僕が日本に来たメリットは数え切れないですね。

今日はABKについてすごく考えて来ました。実はABKを出てから、ここにいる日本人というのは外の日本人とは全然違う日本人だということがわかりました。まあ一言で言うと、変わった日本人たちですねと（笑）。何が変わっているのかをよく考えると、実はABKに通っていた頃は新星学寮の話とか穂積五一先生の話とか、あまり知らなかったんですね。僕は1年しかいなかったので、その1年間は受験のためにひたすら勉強して他のことを考える余裕はなかったのですが、ABKを出て初めてわかったのが、こういう思想があったのかと。こういう思想があったからああいう人たちがいるんだなというのが、実はABKを離れてからすごくわかったんですね。自分たちを捨てても人を助けようと、何十年も、お金儲けのチャンスも若干失って、それでも人を助けようとする人たちがいるということは、ABKを離れてからABKを見た時に、こんなに尊敬できるところに僕はいたんだというのが、一度離れてからすごくわかったことですね。

欧米の場合は宗教的な発想での人助けというのはありますが、ただのお布施とか慈善というのではなくて、何をもってアジアの人たちを自分の人生を、まあ犠牲とは言わないんだけど、きっと楽しくやってらっ

しゃるんでしょうけど（笑）、いろんなチャンスですね、一般論ですといろんなチャンスを犠牲にしてもそういうことを楽しくやるという人たちの原点というのが、僕自身はちょうど日本に22年間いて、40歳も超えて、これからまあビジネスはひたすらばーっとやって、それなりに苦労せずにこれからもいろいろ考える余裕も出てくる時期なので、これから何をしようかという時にABKということは、そういうことだったのかというのを僕はすごく感じます。

そういう意味で、ちっちゃい話だけど、今、日本と中国の間でビジネスをやっていて、上海と東京は2時間ですね。で、実家のある香港の近くに行っても、今は飛行機がスピードアップしていて3時間半くらいで行けるので、アメリカとかでビジネスをやっている友人たちからは「おまえは楽だな」といつも言われています。僕らは月2回くらい中国と日本を往復しているので、本当に大阪に行くのと変わらないと思っているので、そういう意味でこの近さというのは、非常に便利じゃないかということです。

あとは日本は食べ物が美味しいですね。僕はアメリカとかヨーロッパも行くんですけれど、食べ物についてはほとんど印象が残っていない。旅行で家族をいろいろなところに連れて行っても、やはり日本が好きですね。温泉に行ったり。なんというか、言葉の問題だけじゃなくて、うまく収まるというか、いろんなことが、何があっても収まるということがあって、僕にとってはプライベートでも生活でも日本はメリットが大きいと思っています。

尚 捷

1991年来日。アジア学生文化協会日本語コース卒業後、東京工業大に入学。大学卒業後日本にて起業。株式会社Infodeliver取締役社長

そういう意味で「日本留学の意味を考える」というのは、僕一個人としてはいろんな意味があるんだけれども、大きな意味では最近アジアの状況が変わって、相対的に日本の力が落ちた中でどう考えるか。昔は孫文も日本に留学して、日本はまさしく明治維新の後に旧封建主義から世界秩序が変わるという中心になった、アジアの中心になったので、みんな日本に来て革命家になったり戻って国をつくったりとか、そういうのが一番大きな意味だったんですが、今、平和な時代において何をもって日本に

留学するかということになると、相対的に日本の力が落ちた中で、僕は日本の非常に自由な雰囲気、いろんな生き方を許される、いろんな考えを許される、というのが今の日本がすごく持っている価値かなと思っています。そういう意味でしかもその価値観というのは当然ながら欧米にもそれなりに自由はあるけど、それとはちょっと違うんですね。欧米には宗教的な背景とかいろんな複雑な問題があって、日本的な自由とは何かということはあるけど、アジア人にはけっこうフィットするんじゃないかと思うんですね。

しかも最近よく中国で言われるのは、100年前の中国を見ようと思ったら台湾に行くしかない。1000年前の中国を見ようと思ったら日本に行くしかないと。もう中国には残ってませんからね。そういう意味でいろんな文化の箱庭というか、ガラパゴスと言われている日本にはいろんなところが残っていて、特にアジアのコアな部分が残っていると思っているので。そういう意味でみんな経済のことばかり言っていて、実は経済が豊かになったら人間何が残るのと、そのうち各国が気付くわけですよ。だから日本が経済的に一時的に落ちてもたいしたことはないんじゃないのと思っているんです。「金持ち三代続かない」と言う諺がありますが同じですよ。日本はもう金持ちになったから、これからも金持ちどうのこうのと言うのではなく、僕らビジネスの世界でやっているけれど、お金持ちだから何だよというのはあまりないんですね。だからそういう意味で、超えたことを日本はやるべきですよ。日本でもう一回ABKの精神というか、誇りを持って言えばいいかなと思っています。

僕自身が最近自慢する話というのは、「ABK出身だよ、穂積先生知ってますか？」と時々経営者の会合で言うと、「え⁉」と言われるので。というのは、最後はそういう精神的な部分の高さというのが人間尊敬されるのかなと思うので。僕にとっては今日非常にここに来て良かったなと思っています。

小木曽　ありがとうございました。それではもともとマレーシアの方なんですけれど、ほとんどマレーシアにはいらっしゃらなくて、アジアとか中近東とかを駆け回っていて、今日もアブダビからいらっしゃったという、タン・コク・リャンさんにご登場いただきたいと思います。

タン　マレーシアのタン・コク・リャンです。今回はアブダビから来ました。私は1984年だったかな、フーさんと同じ時期に、日本に来まして、日本語を勉強した後電通大に入り、卒業後は理系なのに大和証券に就職しました。そこに決まったのはチュア先輩（チュア・ヤオ・ハン）のお陰様で、金融業界に入ったんですね。それで僕の人生が変わったんですが、大和証券で何年間か働いて、93年かな、マレーシアの友人に呼ばれて、Nazirさんというマレーシアの第2代目首相のトゥン・アブドゥル・ラザク氏の息子さんですが、マレーシアに帰って来いということで、マレーシ

アに戻り、CIMBという銀行に勤めました。そして、十数年前にそこを引退し、同時に金融業界から引退しました。そろそろ子供が欲しかったので引退しました（笑）。もちろん引退したといってもまだ若いですから、いろいろな企業のアドバイザーを、ビジネス・アドバイザーなどをやってました。中国、シンガポール、韓国、そして6年前にアブダビに招かれまして、行ってからもう6年になります。そこはまたやはり違う世界ですね。

僕の人生は一つの場所にはいられない人生かな。学生の時も毎年引っ越してましたから（笑）。それで、アブダビはけっこう凄いところですよ。ドバイはみんな知ってますが、そこには180の国籍の人がいます。もうメトロポリタンですよ。僕はそこでゴルフばかりやってまして、アドバイザーだから仕事はないですよ。ゴルフと食事、あと旅行です。一応中国の大手企業、国営会社、石油会社とか、ゼネコンの会社、あと韓国の財閥、日本の大きな会社のアドバイザー、…。ビジネスとゴルフのアドバイザーですね（笑）。ゴルフが一番多いですね。

日本とは留学した1984年からのお付き合いで、私の日本語学校は学友会ですが、ABKは私の身元保証人です。当時ABKに住んでいたアン・クン・チャイ先輩（MSAJ：在日マレーシア留学生会の執行委員で福祉担当）が私の保証人をABKにお願いしてくれました。来日時の身元保証の他にも大学やアパートの保証人とかもお願いしました。実は、僕が車を買った時の保証人はABKの工藤さんにお願いしました（笑）。私は、毎週1回ABKのロビーで過ごしていたので、いつもABKの学生だと間違われていたんです。大学時代は、チュア先輩の紹介でMSAJの実行委員と副会長、会長をやりました。学生時代にはあまり勉強しないで学生活動ばかりやってましたが、後輩留学生の困っていることの面倒はよく見てあげてました。あと、大使館から深夜に電話がかかってきて、マレーシア人が3Kの仕事に行って困っているので、行ってくれとかですね、いつも通訳で呼ばれてました。

Tang Kok Lian

1983年来日。電気通信大学卒業後日本で就職。その後マレーシアに戻り、現在アブダビでF.R.I Consultancy FZE - Abu Dhabi でCEO（最高経営責任者）

もちろん日本にも良い面と悪い面の二

つあります。一番印象に残ってるのは、ABKの方は非常に熱心で、留学生の面倒をよく見てあげて、留学生の身元保証人とかしてくれたのですが、その身元保証人制度は、日本が国際化できない一番の問題ですよ。外国人が日本に来るのは難しいです。言葉以外に身元保証人が必要で、学校以外にもアパートとか就職とか何でも保証人を見つけなければならない。アラブ諸国と同じですよ。サウジとかUAE（アラブ首長国連邦）に行けば同じです。身元保証人が無いと入れない。だから日本は身元保証人の制度を止めないと国際化は無理です。それが一つ。

二つ目に僕が話したいのは、日本に留学するメリットは何ですか？ということです。はっきり言ってあまりないんですよ。例えば日本の技術はいいとか。それはまあ80年代はそうでしたけど。今は日本はちょっとバック・オフ（back off）です。日本のゴールデン・エラー（Golden Era）はもう終わった、もう過ぎました。ですから、留学生が減ったのは当たり前です。子供に日本に留学したいですかと聞いたら、メリットは何ですかって。卒業してから日系企業に入っても、日系の会社は外国人を社長に雇わない。例えば僕が大和証券を辞めなければ大和証券の社長になれますか？

まあ無理ですね。せいぜいアジア地域の社長じゃないでしょうかね。

3日前に大和証券の昔の同僚と食事をしました。みんな偉くなってますが、「君は無理ですよ。君は外人ですから」と言われます。問題は日本の社会の外国人に対する信頼度です。留学生が日本の大学、東大を出て、ソニーの社長になれますか？ 日本留学生では将来も社長にはなれない。僕はいろいろな会社のオーナーや社長のアドバイザーをやっているから嘘はつきません。

もう一つ、今の日本の社会には、なぜビル・ゲーツとかジョブズが生まれないのか、と言う話です。生まれないですよ。日本はイノベーションとか、国際的に考えてないですから。国内向けしか考えていません。日本しか使えない。言葉のせいかもしれないですね。ビル・ゲーツはアメリカ人で英語。だから、英語で全世界を考えている。そういう違いはあるかもしれないですね。日本にも昔はいろいろな方がいたかもしれませんが、しかし今ははっきり言っていません。携帯電話も今はサムソンとか、5年後は中国のレノボとか、みんなそうなって行くんです。日本は後ろ向きです。ゴールデン・エラーはもう終わったんです。チャンスを抜かれてスーッと離されたんです。でも日本はまだ、技術はあります。

日本がどうやって復活するか。アベノミクスですか。アベノミクスはいいですけど、政治的にはダメですね。隣の国をけなしてはいけません。それはダメですよ。中国、韓国と揉めている。日本人にリーダーシップがないからでしょ。

今、いくつか話したように、今、日本に学ぶメリットは少ないということです。やっぱりアメリカに行った方がいい。ハーバードに行った同期生はハーバード大卒ならどこでも社長になれる、国籍に関係なくIntelの社長に、IBMの社長になれます。

給料もいいしね。日本の企業も外国人を信用して昇格させれば変わるのではないでしょうか。

小木曽　ありがとうございました。タイのブンサクさん、今までの話を聞いていて何かご意見があれば。

ブンサク　私はタイのブンサクです。最初に日本に来た時はまだ日本語が全く分かりませんでした。私は羽田空港で降りて関税を出たけど、どこに行ったらよいかわからい。迎えの人が来ない。受入先の会社から迎えが来てない。それで大変困りました。日本語も分からないので大変心配して、僕が乗ってきた航空会社の人に少し英語を喋って東京のホテルを教えて下さいと言ったら、その人は良い人で、アジア会館を教えてくれたんです。そしてそこに3日間泊まりました。だけど食堂の時間も分からないので食べられませんでした。話が通じない。タイはどこでも、いつでも食べられます。日本は全然違う。3日間は、外に出て歩いてリンゴ、バナナを買って食べるだけ。その時のことを今でもよく覚えています。だから初めての日本の印象は大変悪かった。

3日後、会社に電話が通じ会社からホテルに迎えが来てAOTSの横浜研修センターに連れて行かれました。横浜研修センターのスタッフのみなさんは大変親切で、いろいろ教えてくれて、僕の気持ちもだんだん変わっていきました。日本人はいい人もいると。問題は、僕が日本に来たのが休みの日だったから、会社から迎えが来なかった。電話も通じなかったんです。

Boonsak Charoenkoop

1964年～1965年にAOTS研修生として来日、（株）明電舎で研修を受ける。帰国後、（株）タイ明電舎設立に加わる。現在は、ABK-AOTS タイ同窓会顧問、BIO Corp.代表取締役社長

その後、僕は、横浜研修センターに1年間泊まりました。そして、オリエンテーションと日本語の勉強を1か月間受けて、その後、会社の全ての工場、大崎、品川、…で、1年間かけて勉強をしました。本当は、僕の日本滞在予定は3年間でしたが、僕はがんばって1年間で全部勉強を終えました。　勉強が全部終わったので、僕は会社と話をして、あとの2年間をどうするか相談しました。社長は「ブンサクさん好き

なことをしてください。会社はお金は払います。」と言ってくれたのですが、いろいろなところを見学したり、ぶらぶらしているだけで、勉強しないから時間がもったいない。そこで会社の社長さんとまた話をして僕はタイに帰りたいと言って、それで1年1か月でタイに帰りました。帰ってからタイで明電舎の会社を作りました。日本が59%、タイ側は4人がお金を出しましたが僕もその一人です。そして、株式会社タイ明電舎ができ、それからずっと電機の仕事を16年間やりました。16年間にいろんなダムや変電所、配電所などたくさんの仕事をしました。その後はタイ明電舎を辞めて自分の会社を始めました。電機の会社です。それも16年間して止めて、もう一つ別の会社を作りました。肥料を作る会社で、18年続けています。今は、全部で4つの会社持っています。工場も一つ持っています。僕は日本の会社で研修して勉強したけど、特に技術ところを勉強しました。勉強だからがんばりました。僕は大学に行かなかったので、本当に日本で技術の勉強がしたかったから、日本で、明電舎で電機と機械の勉強をがんばった。そしてタイに帰ったらいろいろな仕事を一生懸命やりました。今、私の3つの会社は子供にあげて、自分は少し仕事をして、旅行したり、遊んでいます。

僕が日本に初めて行ってからもう50年です。今74歳です。みなさんも日本で若い時いろいろ勉強して、国へ帰ってがんばって、会社を自分で作って、がんばれば良いことがたくさんあります。

小木曽　研修はAOTSの横浜研修センターですね。横浜の人たちとは本当に仲が良かったですね。ではタイのスチャイさんお願いします。

スチャイ　私はタイのスチャイと申します。ABK-AOTSタイ同窓会の専務理事をしていますが、今回の式典にはタイ同窓会を代表して出席しました。ABK学館日本語学校の新校舎完成おめでとうございます。

ここでの話について今いろいろ考えてみましたが、自分の経験をみなさんにお伝えしたいと思います。私は、1988年にタイで大学を卒業しましたが、卒業前に日系企業は大学で面接をします。面接で、研修で日本に行けるということで、短い期間でも日本に行けるということですごく嬉しかったことを覚えています。その時は、大阪の吹田にKKC（AOTS関西研修センター）があって、そこに滞在して3か月くらい会社で研修しました。実は、会社に勤める前に日本の文部省の留学試験も受けましたが、残念ながら不合格でした。でもすごく日本に行きたい気持ちがあったので、日系企業に就職して、日本に行けることになってすごく嬉しかったです。

その後、会社の研修で何回か来日したのですが、10年くらいしてまた日本へ行く奨学金の話を耳にしました。それは働いている人のための奨学金制度です。そしてすぐ応募して、今度は合格しました。そして1997年から2年間長岡科学技術大学に留学しました。1999年に卒業したら、本社

から「おまえはすぐ帰っても意味がないから２～３年日本に残って仕事を経験して、その後タイに戻ったほうがいいのでは」という提案がありました。で、私は「わかりました。それでは、日本で２～３年経験したいです」と答えて、そのまま２年位日本で仕事をしてからタイに戻りました。

「おまえはなぜそんなに日本に行きたいのか？」と父から質問されましたが、我々が子供の時は、日本のタイガーマスクとか森田健作とか仮面ライダーとか、そういうものを見て育ったので、日本のよい印象がずっと残っていて、だからいつか日本に行きたいな、日本で勉強したいなという気持ちがありました。

しかし、５～６年前に同じ中間管理職の友達に、「子供の教育はどういう計画を立てているのか？海外に出すのならどこに出すのか？」という質問をしたんです。そうすると答えは、「もし子供が２人いるなら一人は中国に出して、もう一人はインドに出します」という意見が多かったんです。「なぜですか？」と聞いたら、みなさんは、「まず最初に生活とか経済関係とかを考えてるからかな」ということでした。確かに、最近はそう考える人が増えています。これはタイ人すべての代表意見というわけではありませんが、そういう意見もあります。

実は、タイの学生革命からちょうど今年の10月14日で40周年になりましたが、40年前にタイで大学生が民主化を要求するすごく大きなストライキがありました。その時、学生が10万人くらいデモをして、みんなが日本製品をものすごく反対しました。買わないで下さいと。その後、日本政府や日本人がすごくがんばって、タイとの関係を、日本の製品をどうやって変えるかということを考えて、その壁を越えたと思います。その結果、今タイではみんなが日本の車を持っていますし、日本製品もみんな持っています。壁を越えたらタイの人は“サバイサバイ”（のんびりすること）が好きですから。今はタイと日本は乗り越える大きな課題はありませんからサバイサバイです。日本がまた世界で活躍することがこれからの課題だと思います。これからもタイと日本は何かあったら課題を乗り越えて

Suchai Pongpakpien

1988年AOTS研修生として来日。1997-1999年日本政府奨学金で長岡科学技術大学に留学。現在、ABK-AOTSタイ同窓会事務局長、Proac Network Co., Ltd. 経営

行くと私は思っています。以上です。

小木曽　ありがとうございました。それではここで、フロアにおられるマレーシアのヤオハンさん、何かご意見がおありですか。

ヤオハン　マレーシアから来ましたチュア・ヤオハンです。昭和53年から留学しまして、東京大学経済学部、そして大学院を出てからずっと国際金融業界で勤めてきまして、25年です。今は日系企業のアジア進出関連のアドバイザーとして勤めています。直近の仕事としては日本国内の格安航空会社エアアジアジャパンの設立アドバイサーを務めたり、日本国内上場会社の買収合併をやったり、タイであればホテル・オークラ・バンコクを作ったり、マニラであればホテル・オークラ・マニラを作るなど、いろいろな仕事を手掛けています。

この座談会のちょっとしたオブザベーションをしてみました。みなさんのスピーチの中で、一つちょっとした指摘があります。今日は日本の悩みについていろいろ話をしていると思うのですが、そこでみなさんのスピーチの中で「日本」という言葉を何回言ったかを全員分をメモしておきました。トップ賞は中国の尚さんで29回、2番目はタン・コク・リャンさんで28回、3番目はミャンマーのキンキンさんで27回。その次はスチャイさん26回、ミンさん25回、ベー先生22回、カナンシンさん19回、フーさん11回、ブンサクさんは10回。一番少なかったのは、計さんの9回です。

これは何を意味しているのかと言うと、あまりにも日本、日本と言い過ぎてると思いませんか？　たしかにテーマは日本ですが、これはそもそも日本人の悩みなんです。「日本」とばかり言っているから、自分で問題を作ってしまっているのではないですか。世の中の人間って普通の人間です。日本人って別に宇宙人じゃないです。普通の人間です。毎日ごはんを食べて便所にも行きます。それは世界の人間全部一緒ですから、あまり「日本」とばかり言い過ぎるとこういう問題が起きてしまう。自分で作ってしまった問題です。これは一つの指摘です。

もう一つ、一番の悩みはもはや日本で作ったものがいくら素晴らしくても世界では通用しないという問題点ですね。要するにJapanese StandardはもはやGlobal Standardにはなりえないという問題です。これはしばらくの間は変わらない。そうすると、日本の悩みとしては、Japanese StandardをGlobal Standardに合わせていけるかどうかというポイントで、合わせていかなかったら、勝手に日本で生産して日本国内で使って、日本国内で勝手に悩んで下さいということになります。そのことははっきりしています。するかしないかは日本人次第ということです。こういう言い方はきついかもしれませんが、それは正解だと思います。

もう一つの問題点、最後の指摘ですね。北東アジアの緊張関係です。中国とどう付き合うか、韓国とどう付き合うかです。唯一のやり方ですが、これは私がマレーシアから来ているので勝手なことを言えるん

ですが、北東アジアの緊張関係で日本が取るべき戦略は一つしかないんです。これは日本人であれば知っているはずの戦略なんです。みなさん小学校、中学校で誰もが読んだ漫画は何ですか？「ドラえもん」ですね。「ドラえもん」の中に出てくるキャラクターは何ですか？「のび太、ジャイアン、スネ夫、しずかちゃん、ドラえもん」ですね。いいですか、この５つのキャラクターを北東アジアの国に置き換えてみて下さい。日本から見て図体がでかくてすぐ怒って攻めてくるのは誰ですか？　これは中国でしょ。常にでかいジャイアンの力を借りて日本を揺さぶってくる国はどこですか？

スネ夫は北朝鮮ですね。で、日本も中国も一生懸命秋波を送っている国はどこですか？　お互いにこちらの側にいらっしゃい、友達になりましょうという国は台湾ですね。台湾はしずかちゃんですね。そして、ジャイアンにボコボコになぐられて泣いて、泣いて頼みに行くところはドラえもん、アメリカですね。日本はのび太なんですね。のび太が毎回毎回ジャイアンにいじめられて、毎回毎回ドラえもんに頼んで、毎回毎回しずかちゃんと仲良くして、と言いながらジャイアンとも仲良くみんなで遊んでるじゃないですか。けっこう楽しく最後はやってるんですよ。泣きながら笑いながら殴りあいながら、でも最終的には楽しくやっていますね。これはどういうことを意味しているのかというと、のび太は主人公だけど一番強いキャラクターではないじゃないですか。弱々しいのび太がそのストーリーの主人公なんです。要するに日本がこれから北東アジアで取るべく戦略というのは何かというと、のび太戦略なんですね。この戦略を実行して行きますと、北東アジアもなかなか楽しい地域になりますよ。でも実際それでは弱いじゃないかと。しかし、中国にケンカでも戦争でも仕掛けて行くなどしたら、ボコボコに殴られ、またそういう問題の繰り返しになりますから。これは私の持論です。よくよく吟味してみて下さい。ありがとうございました。

Chuah Yeon Hang

1978年国費留学生として来日。東京大学経済学部卒業後、東京大学大学院修士課程（経済）修士号を修得し、山一証券に入社。その後米系投資銀行のメリルリンチ、サロモン・ブラザーズ、欧洲系ドイツ銀行、バークレイズ銀行など国際金融関連企業を経て、現在は、自社設立（株式会社インターアジア・リンクス　代表取締役。日系企業のアジア進出およびアジア企業の日本進出のアドバイザリー業務を提供

ウン　二回目の発言があると思って待っていました。時間の関係で短く喋らせていただきます。私は日本留学の意味について、

私個人にとって何が一番意味があったか考えてみると、やはりABKと関わったことだと思います。それは何かというと、今日の式典の私の挨拶の中で話しましたが、かつて日本に留学するとき保証人が必要でした。マレーシアの学生が日本人の保証人を探すことは不可能なことです。そこで、マレーシアの後輩たちが日本に留学できるように在日のマレーシアの学生会が中心になってABKに保証人をお願いしました。そして結果的に1980年から1997年までABKに保証人になっていただいたマレーシアの留学生の数は約800人くらいになります。彼らは大学を卒業した後、ほとんどがマレーシアに帰ったと思います。

実は、マレーシアのジョホールバルにマレーシア留日学生会（JAGAM南支部）という会があります。つい最近の10月16日に、JAGAMが主催した盆踊りがありました。これは私がこれまで見た中で一番規模が大きな盆踊りでした。一周りたぶん1000人くらいいました。中央舞台の上に立っていたのは日本人もいればマレーシア人もいました。東京音頭とか、つい最近できたジョホール音頭という曲にのって、舞台に立っていた人の振り付けを見ながら皆が真似をして踊りました。これを主催したJAGAMの役員の中には元ABKの学生さんが何人かいて活躍していました。やはり彼らはマレーシアに帰って、日本の文化をマレーシア人に紹介する橋渡しをしています。そういうことをすることによって、マレーシアの人々が日本の文化に接する機会ができ、両国民がもっと友好的になったと思います。そういう意味で元日本留学生の果たす役割が大きいと思っています。

小木曽　ありがとうございました。ご発言はそれぞれ1回だけだったんですが、いろいろ率直なご意見を承って、本当にありがとうございました。傍聴された方にも、それぞれ何か心に留まる言葉があったのではないかと思います。今日はこれで終わりにしますが、これからもどうぞいろいろな忌憚のないご意見をABKにお寄せ下さるようお願いします。ありがとうございました。

司会　1回の発言だけではまだ言い足りないことも多いと思いますが、時間が来ましたので、終わりにいたします。ありがとうございました。

「生誕百十一周年記念―穂積五一先生を偲ぶ会」開かれる

2013年12月12日、「生誕111周年記念―穂積五一先生を偲ぶ会」が、ABK－AOTS　Dosokai Thailand、TPA（Technology Promotion Association(Thailand-Japan)、TNI (Thai-Nichi Institute of Technology) の共催により、タイ・バンコクのTNIのホールで開かれた。出席者は、パイシット元TPA会長、スウィット元TPA会長、スポンTNI理事長・元TPA会長、クリサダTNI学長、スチャリットTPA会長、ソムスリABK-AOTSタイDosokai会長、金子HIDA理事長、小木曽ABK理事長、白石ABK理事はじめ、タイ人関係者および在タイ日本人関係者が100名以上出席し開催された。会は、まず、スチャリットTPA会長の開会の挨拶にはじまり、スウィット氏による『内観録　穂積五一遺稿』のタイ語抄訳冊子作成とこの会を開催するに至った経緯の説明に続き、小木曽氏およびスポン氏による穂積先生を偲ぶスピーチ、そして金子氏による挨拶がつづいた。

この時期にTNI、TPA、同窓会の学生、先生、理事、職員たち関係者、また日本人関係者にもあらためて、穂積先生の考え方、生き方、TPA、TNIの設立に至る経過を、先輩たちの話を通じて伝えることができ、意義深い会であった。

スピーチをするスウィット氏（上）とスポン氏（下）

＜アジア学生文化協会理事長 小木曽友のスピーチ全文＞

Distinguished Guests, Ladies and Gentlemen,

It is my great pleasure for me to make a speech today in the memory of the late Mr. Hozumi Goichi, the Founder or First Director General of ABK (Asian Students Cultural Association), AOTS (Association for Overseas Technical Scholarship) and JTECS (Japan-Thailand Economic Cooperation Society).

As you know well, Mr. Hozumi wholeheartedly cooperated in the establishment of Technology Promotion Association (Thailand-Japan), or TPA, of which the objective is to be the centre for promoting knowledge, disseminating and transmitting new technology from Japan to Thailand for the growth and advancement of the Thai economy and industry.
It was officially established on the 24th of January 1973 with the strong intention, co-operation, and sacrifice of the Japanese university graduates and those who were trained in Japan with the ABK and AOTS. Mr. Sommai Huntrakul, the Finance Minister at that time, was the president of the establishing committee, and the establishment succeeded with the support of Mr. Hozumi Goichi, the former director general of JTECS.
The late Mr. Hozumi was born in Aichi Prefecture, Japan in 1902 and passed away in 1981 at the age of 79. In his childhood he was deeply affected by his mother who strictly taught him not to discriminate against human being by social standing. After he graduated from the junior high school he suffered seriously from religious suffering. After several years he became spiritually awakened that all living things have common life and "life lives on life. We all eat and are eaten". Consequently he became a vegetarian.

After he graduated from the University of Tokyo in 1930, he did not get a job at all, but became the leader of a dormitory named Shikenryo consisting of students, laborers and farmers from Japan and Korea aiming at solving the social problems such as poverty, discrimination, political conflicts etc. which Japan and Asian countries were facing at that time. He was opposed to Tojo Government who intended to open war against USA because he was sure it inevitably would lead to the invasion war to the Asian countries, and was imprisoned. After World War II, the Shikenryo was renamed to the Shinseigakuryo which consisted of only university students from Taiwan, Korea, Thailand, Ceylon, Bangladesh, Vietnam etc. as well as Japan. In 1960 he founded Asia Bunka Kaikan (ABK) by collecting donations widely from private sectors in Japan, where university students and technical trainees from Asian, African, Latin American countries including Japan lived together in the atmosphere of a home away from home.

Mr. Hozumi once lived with strict discipline in a Zen temple in Shizuoka Pref. in his youth. The living style of the students at the Shinseigakuryo dormitory as cleaning and cooking were made by themselves was considered to have followed that of the Zen temple.

Mr. Hozumi was once compared to Ganjin, the founder of Toshodaiji in Nara by the late Mr. Matsumoto Shigeharu, the Founder of the International House of Japan. Ganjin, a Chinese priest who was to found Toshodaiji Temple in Japan in his later years, was invited by Emperor Shomu to teach the Chinese Buddhist precepts in Japan. He accepted this request, proving his dedication in a journey that took twelve years, five unsuccessful attempts and the loss of his eyesight before he finally crossed the ocean and arrived in Nara in 754. In Japan he had an ordination platform constructed in front of the Hall of the Great Image of Buddha at Todaiji Temple where he gave an ordination ceremony, which had long been awaited in Japan to many Japanese priests and people of high standing as well as to the emperors at that time. Around that time, Japan was gradually forming itself into a Buddhist country, and we can say that it was the arrival of Ganjin that consequently completed this movement in Japanese history. His achievements were so influential to Japanese Buddhist and cultural history that he is to this day considered a figure of particularly distinguished services to Japan.

Mr. Hozumi, like Ganjin, disseminated his thought and ideal as shown below among the Asian、African and Latin American people and Japanese as well beyond the borders:
「アジア、アフリカ、ラテンアメリカの青年学徒が、アジア文化会館における数年間の共同生活を通じて、すべての個人すべての民族の自主と平等の原則を実証する」
“Through the devoted and voluntary efforts of the young students from Asia, Africa, and Latin America who, by living together for several years at the Asia Bunka Kaikan promoted the inalienable dignity of the human individual, and the victory of this noble crusade became the foundation for the understanding and respects of each nation and human race.” It is called “Hozumi Spirit” to this day.
It may be said that thousands candles can be lit from a single candle, but the life of the candle will not be shortened by being shared.

In the campus of TNI (Thai-Nichi Institue of Technology) two bronze
statues were erected last summer honoring Mr. Sommai Huntrakul and Mr. Hozumi Goichi for their contribution to TPA. On the both sides of the pedestal of statues the words of two great pioneers are carved as follows:

この600年の間の交流で、タイに対する日本人の気持ちの中に亀裂が生じるようなことはほとんどなかったのではないかと思います…日本とタイはこれからも永遠に友好国として助け合うでしょう。
ソムマーイ・フントラクーン　　1983年8月

TPAの設立は、タイと日本の深い人間のきづなの上に成り立っているもので、当初の約束に則り、タイの自立と繁栄をめざして進められてこそ、生命があり、発展性があるものと言えましょう。
穂積五一　　1973年1月

During the past 600 years of exchange, I believe that the Japanese have had almost no negative sentiment toward Thailand. I desire that Japan and Thailand continue this bilateral partnership of assistance forever.
Mr.Sommai Hoontrakul August, 1983

With the foundation of TPA, a deep understanding between Thailand and Japan was formed. Following the original agreements, the goals of Thai self-reliance, life, and development will have been achieved.
Mr. Goichi Hozumi　　January, 1973

Last but not least, I would like to express my heartfelt gratitude to ABK-AOTS Dosokai Thailand, TPA, TNI and all the persons concerned who have united their efforts in holding this meeting in the memory of the late Mr. Hozumi Goichi today.
Thank you.

December 12, 2013

Ogiso Yu
Director General
The Asian Students Cultural Association

故穂積五一先生を偲んで

穂積五一先生〔ABK（アジア学生文化協会）、AOTS（海外技術者研修協会）、JTECS（日タイ経済協力協会）の創立者・初代理事長〕は、1902 年、愛知県に生まれ、1981 年 79 歳で他界した。幼年時代には、人間をその社会的身分によって差別してはならないという母の厳しい訓えに深い影響を受けた。中学卒業後、自分とは何か、死ねばどうなるのだろうという深刻な生の悩みに陥ったが、数年後、生きとし生けるもの皆同じいのちにつながっている、人間は、他の生物のいのちを犠牲にしなければ生きてはいけないのだ、という宗教的な目覚めを体験したのであった。その結果、菜食主義者となった。

1930 年、東京大学を卒業後はどこにも就職せず、至軒寮という寮を主宰し、当時日本やアジアの国々が直面していた貧困、差別、政治紛争などの社会問題を解決する運動に取り組んだ。寮生には、日本や朝鮮（当時）の学生、労働者、農民などが住み、出入りした。東條内閣が始めた対米戦争に反対し逮捕投獄されたが、これはこの戦争が必然的にアジアへの侵略戦争につながるとの信念に基づいていた。第二次世界大戦の後、至軒寮は新星学寮と改名し、日本はじめ、台湾、韓国、タイ、セイロン（現スリランカ）、バングラデシュ、ベトナムなどアジア諸国の大学生たちが寮生となった。穂積先生は、若いころ静岡県の禅寺で厳しい修行生活を送った経験があり、新星学寮が炊事、掃除を寮生自身が行う自主的な寮となったのは、禅寺の生活スタイルが取り入れられたためであると考えられている。1960 年、穂積先生は、日本の財界など民間から広く寄付を募り、アジア文化会館（ABK）を建設した。ABK では、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの留学生、技術研修生が家庭的雰囲気のなかで共同生活を営んだ。

穂積先生は、かつて松本重治氏（国際文化会館創立者）により、鑑真和上に譬えられたことがあった。和上は聖武天皇に招かれて中国仏教の教えを日本に広めるために来日し、後年唐招提寺を建立した中国の僧侶である。和上は日本からの要請を受けて渡日を試みたが、5 度も挫折し視力も失い、12 年後の 754 年、遂に海を越えて奈良にたどり着いたのであった。日本では、東大寺の大仏殿の前に戒壇を設立し、天皇はじめ高僧や貴族たちに、待望されていた戒を授けた。当時日本は仏教国家としての国づく

りを進めつつあったが、日本歴史においてやがてこの国造りが完成を見ることになったのは、鑑真の来日がきっかけであったと言うことができよう。鑑真の日本仏教ならびに日本文化史に及ぼした功績は極めて顕著であったので、今日、日本のために貢献した特別な功労者とみなされている。

穂積先生は、鑑真和上のように、日本をはじめアジア、アフリカ、ラテンアメリカの人々に、「アジア、アフリカ、ラテンアメリカの青年学徒が、アジア文化会館における数年間の共同生活を通じて、すべての個人すべての民族の自主と平等の原則を実証する」「一灯やがて万灯となるごとく、アジアにヒューマンネットワークをひろげる」という自分の理想を広めようと全身全霊をもって努めた。

昨（2012）年夏、バンコクにある泰日工業大学（TNI）のキャンパスには、泰日経済技術振興協会（TPA）への貢献を称えて、ソンマイ・フントラクーン先生と穂積五一先生のブロンズ像が建てられたが、その台座の両側には次のような言葉が刻まれている。

この600年の間の交流で、タイに対する日本人の気持ちの中に亀裂が生じるようなことはほとんどなかったのではないかと思います…日本とタイはこれからも永遠に友好国として助け合うでしょう。
ソムマーイ・フントラクーン　　1983年8月

TPAの設立は、タイと日本の深い人間のきづなの上に成り立っているもので、当初の約束に則り、タイの自立と繁栄をめざして進められてこそ、生命があり、発展性があるものと言えましょう。
穂積五一　　1973年1月

（英文スピーチの抄訳）

主な式典参加者のみなさん

ＴＰＡが国際交流基金賞を受賞

ABKの姉妹団体であるタイの泰日経済技術振興協会（TPA）が2013年度国際交流基金賞を受賞しました。この賞は国際交流基金※が、学術、芸術その他の文化活動を通じて、国際相互理解の増進や国際友好親善の促進に長年にわたり特に顕著な貢献があり、引き続き活躍が期待される個人または団体に対して授賞するもので、1973年に創設されました。

TPAは開校以来40年間、日タイ両国間における国際交流および人材育成に多大な貢献を果たしてきた功績が評価され、92の個人および団体の中から有識者の審査を経ての受賞となりました。

10月15日（火）にホテルオークラ東京で行われた授賞式。2013年度は１名と２団体が受賞。（右端がTPAスチャリット会長）

壇上で駐日タイ大使ご夫妻と記念撮影をするスチャリット会長（左から４人目）と同行したTPA役員

後日、受賞者による記念講演会が行われ、スチャリット会長は10月18日、「泰日経済技術振興協会（TPA）の40年：日本からタイへ、そしてアセアン共同体に向かって」というタイトルで講演を行った

※ 国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は1972年に外務省所管の特殊法人として設立された団体で、海外21カ国に22の海外拠点を持ち文化芸術交流、海外における日本語教育および日本研究・知的交流の3つを主要活動分野としている。

わたしたち、だから日本に留学しました！

何 泗杰さん（Mr. Clinton Ho Chye Keat）　林 龍安さん（Mr. Lim Loong Ann）

ABK 日本語学校生に日本留学の理由と感想をうかがう本コーナー。今回はマレーシア出身のお二人にご登場いただきました。

林（リム）さんと何（ホー）さん

――― 日本や日本語に興味を持ったきっかけと留学の動機を教えて下さい。

何　きっかけは中学生の時に見始めたNARUTO やワンピースなどの日本アニメで、日本語のセリフを聞いたことです。今まで聞いたことのないリズムの言葉で面白いなあと思い、よくセリフを真似ていました。そして 16 歳くらいから日本人の先生の日本語教室に週一回通うようになり、本格的に日本語の勉強を始めました。ですからずっと日本が好きで、日本を旅行したいと思っていたのですが、母から「そんなに日本が好きなら、旅行より留学してしまいなさい」と言われたんです。その言葉を聞いた時は信じられないほど嬉しかったですね。

林　私は英語、中国語、マレー語を話すことができますが、留学するのなら今まで学んだことのない新しい言語を勉強したいと思っていました。日本を選んだのは、中学生の時にワンピースなどのアニメや日本の漫画を見て、興味を持っていたことや、先に留学していた兄から良い印象を受けていたからです。

――― 日本に来て戸惑うことはありませんか。

林　日本人の生活習慣はマレーシアとは全く違いますね。マレーシア人の生活スタイルはあまり忙しくなくて、のんびりしています。特に日本人の歩くスピードはとても速い。僕も最近は速くなってきましたけど、まだ追いつけません。マレーシア人はどこでも友達と話しながらゆっくり歩きます。またレストランではお喋りをしながら時間をかけて食べます。東京のレストランは小さくて席が少ないので、ゆっくり話せない。それに食べ終わると全部皿を下げられてしまうので、長く居づらいですね。とにかく、東京での生活は全体的に急がないといけない気がします。

何　僕も同じ気持ちです。それから、マレーシアはだいたい 130 円くらいで一つのどんぶりご飯が食べられます。日本は安くても 400 円ほどしますから、食費がかかりますね。

林　マレーシアと日本では余暇の過ごし方が違いますね。日本人は公園でいつもピクニックをしていますが、マレーシアにはネットカフェや、食堂があちこちにあるので、そういった所にみんなが集まって過ごします。しかもだいたいの店が 24 時間営業です。映画館も多くて、1 回 300 円くらいで観れますから、映画も気軽に観

ることが出来ます。

――― では日本の良いところはどうでしょう。

何　まず季節です。マレーシアはずっと夏のような感じですから、季節の移り変わりによる気候や景色の変化があることはいいなあと思います。僕は今年梅雨を初めて体験したんですが、不思議な経験でした。マレーシアでも雨期になると３日～１週間雨が降り続きますが、日本の梅雨時の雨は小粒で、傘をさしていても気がつくと体が濡れている。そういう経験はマレーシアにいた時はありませんでした。

林　日本は移動がとても便利です。公共交通機関が充実していてどこにでも行けます。マレーシアでは車がないとどこにも行けません。タクシーやバスもありますが、マレーシアのタクシーは世界で一番評判が悪いんです。メーターは使わないし、相場の３倍くらいの値段をふっかけてきます。バスは時間がまったく読めないので、約束などがある時には使えません。それから日本はどこでも街がきれいですね。

何　今は日本の生活に不満はありません。マレーシアが恋しいのは食事だけです。例えばインド料理、マレー料理、故郷の料理を気軽に食べたいです。日本でもマレー料理屋はありますが、マレーシアのように辛くありません。本当のマレー料理はとても辛いんですよ。

――― 食事はいつもどうしていますか。

林　だいたいファーストフードです。

何　以前はガスト、松屋、すき家のローテーションで回っていました。そして月に一回はピザ食べ放題のお店に行ったり、マレー料理の店に行ったりして少し贅沢をするんです。最近は自炊するようになりましたし、飲食店でバイトを始めたので賄い料理も食べられます。

――― 日本の生活で不安を感じることはありませんか。

林　外出時、友達と中国語で話していると、周りの日本人がいい顔をしない感じがします。

何　だから僕たちはいつも英語で話すようにしています。

林　中華系マレーシア人は普段は中国語で話すんですが、声も大きいからちょっと目立って不安を感じます。

――― お二人とも京都の大学に進学が決まったそうですが、専攻や学校はどのように決めましたか。

何　僕は日本で学ぶのなら、以前から興味を持っていた建築デザインのことを勉強したいと思っていました。日本で大きな地震が起きても建物があまり壊れないことに感心をしたからです。そこでデザインと建物の強度の関係等について勉強したいと思ったんです。

　大学探しはインターネットの検索サイトで「建築デザイン」と入力して探しました。そこで見つけた京都の大学の体験ツアーに参加して、良い印象を持ったので、AO入試を受けてみて合格することができました。大学の場所は日本全国どこでもいいと思っていました。不安は留学生が他にいないことですが、それはあまり深く考えず成り行きに任せます。そして自分が先輩になったらマレーシアの留学生にPRして、後輩を増やせればいいと思っています。

林　僕は将来、オリンピックのような国際的なイベントを企画できる人間になりたいと思っていましたから、国際文化が学べる大学を先生に紹介してもらい受験を決めました。交換留学のプログラムがあって、外国に行けるチャンスがあることも魅力です。それから関西は東京よりのんびりしていてマレーシアに似たものを感じますね。学校があるのは田舎なので、さらに平和的な感じで気に入っています。

――― お二人とも、将来を楽しみにしています。今日はありがとうございました。

泰日工業大学（TNI）奮闘記

③ 微笑みの国より、一流のビジネスパーソンを目指して

亀島啓喜

「教師をその気にさせてくれる学生たちです。」

TNIの学生の印象を問われる時、私はいつもこのように答える。この4年間、この思いはいっそう強くなっている。

まず、彼らの明るさと楽天主義がいい。そして、素朴で思いやりがある。首都バンコクにある大学でありながら、「すれた学生」などどこにも見当たらない。

授業中の一斉読みでは、元気いっぱいの大声で読んでくれる。求めれば得意げに日本語で歌ってくれたり、日本のTVCMについて議論をする授業では、映像と音楽に合わせて踊ってくれたりする学生もいる。日本ではまず見られない姿である。個別指導の際にジュースやカノムタイ（タイの伝統菓子）を差し入れてくれることもある。

そして、何よりも教師を敬う気持ちは世界一ではないだろうか。タイには幼稚園から大学に至るまで、ピティーワイクルー（先生を敬う会）という催しがある。全校を挙げて教師に感謝する式典であるが、これはまさにタイ王国の伝統教育における最大の成果の一つである。

彼らの独立心と行動力もまた頼もしい。まず、TNIや外部組織の各種プログラムを利用した日本への短期留学や交流事業に参加する学生が実に多い。日本では内向きな学生が増えているとよく聞くが、タイの学生の視野は明らかに外向きである。また、両親の負担の軽減と会話能力向上の一石二鳥を狙って日本料理店等でアルバイトをする学生も少なくないし、夏休み中に米国でのWORK & TRAVELプログラムに参加する学生も多い。中には、中国の大学への短期留学を、申し込みから現地での生活準備に至るまで全て自力でやり抜いた学生もいる。

このような個性溢れる意欲的な学生達に毎日接していると、微力ながら彼等の夢の実現のために頑張らねば（！）という思いが湧いてくる。

以上のようなTNIの学生達が持ち合わせている素養には測り知れない潜在力を感じる。彼等は2015年から発足するAECの枠組みの中で更なる発展を目指すこの国にとって、発展の大きな力になり得る人材である。

TNIを始め国内の多くの若者がこのような精神性を維持しつつ、夢を追いながら努力を重ねることにより、この国がアジアと世界にいっそう称賛され、尊敬

ＴＶＣＭ担当スタッフになり切って積極的に発言し、意思表示をする学生（写真左）

グループ活動：専門用語を使用する文章の並べ替えと説明を終えて（よくできました！）

される国へと発展していくことを心から願っている。

私は経営学部に所属し、主に３年生に対してJAPANESE FOR MANAGEMENTⅠとⅡを教えている。「一流のビジネスパーソンを目指して」を学習のスローガンにして指導している。

以下に、彼らの奮闘ぶりを紹介したい。

Ⅰの講座では、挨拶、時間厳守等の基本的なビジネスマナーから会社で日常的に使用される基本的な用語や表現、さらには基本的な専門用語まで、できるだけ多く習得すべく熱心に取り組んでいる。

Ⅱの講座では、Ⅰと同様の基本的な指導に加えて、日本のTVCM等を活用した聞き取りやディスカッション（会社の会議の模擬演習）にも挑戦している。ⅠとⅡの学習において彼等にとって最大の難題が漢字である。毎週の授業で与えられる約20の語句を１日３個ずつ書いて覚える「漢字マラソンノート」の活動のアフターケアとして、授業の冒頭で習得状況のチェックをしている。自分が覚えた漢字を書こうと我先にホワイトボードに駆け寄る姿は実に微笑ましい。学習に真剣に取り組む彼らの意欲は私にとって大きな励みである。

授業では、職業人として自発的に発言する意識を植え付けることにも力を入れている。全ての自主的な発表や発言をポイントとして記録しているので、学生は積極的に手を挙げて発表してくれる。このいい意味での貪欲さは「一流のビジネスパーソン」になるためには欠かせない素養であると思っている。

今後ますます発展していくこの「笑みの国」から一流のビジネスパーソンとして飛び立つことを夢見る学生たちに心からのエールを送りたい。

亀島啓喜（かめしまけいき）
泰日工業大学経営学部講師。日本で高校教師として定年退職後、2009年より現職。

学校法人 ABK 学館日本語学校設立
ABK同窓生募金寄付者芳名録(2010.6-2013.7)

Contributors to the ABK Alumni Fund for the establishment of ABK COLLEGE

A

A.A.A.W.I.(AOTS Alumni Assoc. of Western India)
ABK and AOTS Alumni Assoc. (Thailand)
ABK·AOTS Dosokai Chennai Center
ABK Ryugakusei Tomonokai
(ABK 留学生友の会)
Abul Sharah
Accent Manufacturing Co., Ltd.
Adelyn Ngo
Aiko Tachibana(水馬愛子)
Ajia no Atarashii Kaze(アジアの新しい風)
Akaboshi Yutaka (赤星裕)
A.K.M. Moazzem Hussain/Eiko(営子)
Alan Tan Yu Poo
Alberto Tachibana
Alice Nakamori
Amano Takaaki(天野高明)
Amy Tan Choong Noi(陶春蓮)
Ando Tetsuo(安藤哲生)
Ang Gi Moh(洪以謀)
Ang Khoon Chye(汪坤才)
Ang Lip Chee(洪立志)
Ang Sheng Feng(洪巧芬)
Ang Wan Leng(洪達齡)
A. P. Wagle
Apple Vacation & Conventions Sdn Bhd(苹果旅游有限公司)
A.R. Siddiqi
Arai Keiji/Yuri(新井敬二/由利)
Arai Shigemitsu(新井重光)
Arakawa Katsuhiko(荒川雄彦)
Araya Mikiko/Miyako(新谷美紀子/美也子)
Ariel Cheng(鄭欣霖)
Asami Hiroko(浅見博子)
ASCA50 Committee(50 周年記念委員会)
Ashok Saraf
Aung Kyaw
Aw Leong Gee(欧良義)

B

Bandhit Rojarayanont
Bando Yoshihiko(坂東慶彦)
Bangkok Cable Co., Ltd.
Banpu Public Co., Ltd.
Beh Chor Khim
Beh Teck Chuan
Boon Woo Seng(温武成)
Boonlert Chao-opas
Boonsak Charoenkoop
Boorachit Piboon
Budhi Setiawan Kohar
Bunsong Phokhathong

C

C.M. Aung
Cai Jian Ping(蔡堅平)
CH. Karnchang Public Co., Ltd.
Cha Yee Seng(謝宇誠)
Chai Koo Peng
Chamlong Srimuang
Chang Chung Hsin(張忠信)
Chan Huan Pang(曾燒邦)
Chan Kok Foo(陳国富)
Chan Jui Teng(張瑞騰)
Chan Siu Ngan (陳小雁)/TanYewTeong
Chandrasiri N.P./Liu Jin(劉晶)
Chang Chew Chin(張照成)
Chang Sou Wah(張素華)
Chanin Phooprasert
Chanintorn Mekaratana
Chanthason Inthavong
Charles Chow(邹貴琛)
Charnchai Thanapura
Chaw Kam Shiang(周錦生)
Cheah Soo Lin
Cheang Chuan Ley
Chen Ai Chi(陳艾圻)
Chen Chun Ming(陳俊銘)
Chen Hong Zhen(陳洪真)
Chen Xian(陳献)
Cheng Ja Chong(鄭捷聰)
Cheong Bee Nah(鍾美娜)
Cheong Sai Keong
Cheovet Yimsirikul
Chew Ching Seng(周昌盛)/Low Kim Lee(刘金莉)
Chew Fook Keong(周福强)/Goh Ger Teng(吳月婷)
Chia Guan Sey(謝元生)
Chia Hong Nyiap(謝鴻業)
Chia Li Teck(謝礼得)
Chia Mee Hang(蔡美賢)
Chikayama Takeko(近山武子)
Chin Saw Kiun (陳少勤)
Chin Yok Wan (陳玉旺)
Chinaithorn Tipakonkan
Chino Katsuko(千野克子)
Chiu Jin Eng(周人英)/LimHui Pin(林惠冰)
Choi Man Wa(蔡敏華)
Chok Kittipongthavorn
Chong Piang Wee(張炳威)
Chong Teek Foh(張德福)/Chow Soo Lin
Choo Yun Fah
Choong Chee Yee
Choong Yoon Seng
Chou Hsun Kwei(周順生)
Chow Kwee Lin(邹貴仁)
Chuah Yeon Hang(蔡耀横)/Keong Chin Huai
(強青懷)
Chuan Seong Tiang
Chuewhuad Co., Ltd.
Chuie Wai Kong(朱威銳)
Chusak Lakavat
Clifford Lee(李進才)
Conimex Co., Ltd.

D

Dai-Ichi Packaging Co., Ltd.
Dai Zhi Jian(戴志堅)/陳艷萍
Dao Thi Minh
Denso (Thailand) Co., Ltd
Ditdi Puttongul
Dong Du Japanese Language School
(ドンズー日本語学校)

E

Ee Ley Tiong(余励忠)
Endo Forging (Thailand) Co., Ltd.

F

First Floor Architects Co., Ltd.
FN Factry Outlet
Fong Cheong Thiam(洪昌諂)
Fong Wee Keat
Foo Choo Wei(符祝慧)/Kondo Noboru(近藤昇)
Foo Hee Hiang(符気強)
Foo Keah Keat
Foo Ming Lian(符明蓮)
Foo Siang Seng(符祥盛)
Foo Soo Kong(符樹光)
Foo Yong Tse
Foo Yuki(符優綺)
Force International　Co., Ltd.
Francisco Hironori Ishihara
Fujita Yoichi(藤田陽一)
Fujiwara Kazue(藤原一枝)
Fukatami Takao(深民崇夫)
Fukazawa Nozomi(深澤のぞみ)
Fuku Joji(福壌二)
Fukumoto Hajime(福本一)
Furukawa Shigeyo(古川恵世)
Furuya Emiko(古谷恵美子)
Fuse Tomoko(布施知子)

G

Gan Kok Seng(顔国成)
Gan Seu Kian(顔綉涓)
Gan Siang Kiong(顔尚強)
Gan Teck Yeow(顔德耀)/Tan Such Fang
Gannigar Koontanakulvong
Gao Rong(高榮)
Garugu Hisamaro/Sumiko(雅留宮久麿/澄子)
Goh Peng Ooi
Goh Swee See(吳瑞舜)
Gojo Shoji(五条章二)
Gui Ngeg-Ang
Guo Nan Yan(郭南燕)

H

Hahn Young Koo(韓英鳩)
Ham Poh Can(范宝权)
Ham Poh Chyan
Hamada Osamu(濱田修)
Hamada Yoko(濱田洋子)
Hamazaki Nagatoshi/Kazuko(浜崎長寿/和子)
Hashiguchi Masato(橋口真人)
Hashimoto Islam Nurul(橋本イスラム・ヌルール)
Hata Kokichi(秦幸吉)
Hattori Masae(服部まさ江)
Hayashi Toukyo/Hisako(林登居/ヒサ子)
Hayashi Hitoshi(林均)
Heng Fu Chong
Heong See Yong(香世运)
Hew Boon Thai
Higuchi Jun(樋口淳)
Hikawa Yoshimi(樋川好美)
Hirai Mariko(平井まりこ)
Hiramine Masaru(平峯克)
Hiraoka Akiko(平岡昭子)
Hirata Hiroshi(平田熙)
Hiroe Shigetoku(広江重徳)
Hironaka Gunji(広中軍二)
Hokari Reiko(帆狩礼子)
Hori Kanami(堀香奈美)
Hori Yukio(堀幸夫)
Horiuchi Chiyoko(堀内智代子)
Hoshi Akihiro(星明廣)
Hosokawa Satoshi(細川哲士)
How Chai Nguan(侯再源)
Hozumi Goichi-sensei Tsuito Kinen Shuppan Iinkai(穂積五一先生追悼記念出版委員会)
Hozumi Ryoji(穂積亮次)

I

Ide Yu(井出遊)
Iinuma Hidero(飯沼英郎)
Ikeda Shunji(池田俊二)
Ikemori Ryosuke(池森亨介)
Ikeno Tomohiko/Akiko(池野朋彦/晶子)
Ikezoe Takayuki(池添尚行)
Ikuta Yoko(生田容子)
Inada Koji(稲田幸司)
Inagaki Toshihiko(稲垣敏彦)
Inasawa Koichi(稲澤宏一)
Inoue Keiko(井上恵子)
Inoue Susumu(井上駿)
Inuzuka Masahiro(犬塚雅大)
Isa Reiko(伊佐玲子)
Ishihara Hiroshi(石原廣)
Ishihara Masakazu(石原政一)
Ishihara Takanori(石原誉慎)
Ishii Nobuhiko(石井信彦)
Ishikawa Tsuyoshi/Yuko(石川毅/優子)
Ito Ikuko(伊藤郁子)
Ito Jun(伊藤順)
Ito Kaname(伊藤要)
Ito Motoyuki(伊藤源之)
Itti Rittaporn
Ittipan Amornuttagovit
Iwai Hideaki(岩井秀明)
Iwai Hideo(岩井秀生)
Iwao Akira(岩尾明)
Iwasa Yoshihide(岩佐佳英)
Iwasaki Yukiko(岩崎幸子)

J

Jia Fu Zhong(賈福忠)
Jia Hui Xuan(賈慧萱)
Jin Qiu(金秋)
Jing Dong Huan(金東澣)
Joan Wai Kim Foh

K

Kai Hitoshi(甲斐等)
Kakeya Tomoko(掛谷知子)
Kakurai Hiroyuki(加倉井弘行)
Kameyama Toshifumi/Sachiko/Tai(亀山稔史/幸子/泰)
Kaneshige Michio(兼重道雄)
Kaneshige Setsu(兼重節)
Kaneshige Tomoo(兼重智雄)
Kang Chin Yeh(江晋燁)
Kanzaki Sorada(神埼ソラダ)
Katsube Junki(勝部純基)
Katsuki Emiko(香月恵美子)
Katsuki Fujika(香月富士日)
Kawai Hidetaka(河合秀高)
Kawakami Tsuyoshi(川上剛)
Kawasaki Yorikuni(川崎依邦)
Kanezawa Kei(金澤けい)
Kem-Ngurn Chautchaiyun
Kenneth Wong Fook Shang(黄復翔)
Kevin Ng(吳綿強)
Khu Hwa Leng(邱華龍)
Kikuchi Sachiko(菊池幸子)
Kita Matsu(北マツ)
Kitagawa Yasuhiro(北川泰弘)
Kitahara Chie(北原千絵)
Kitayama Fumiyasu(来山文泰)
Kittipong Kachchapanonda
Kobayashi Hiroshi (小林浩)
Kobayashi Taiko(小林泰子)
Koh Hong Hwee(許鴻輝)
Koh Yock Heng(許育興)
Kojima Akihiko(小嶋秋彦)
Kokubu Takuji(國府卓二)
Komatsu Denki Sangyo Co. Ltd 小松電機産業(株)
Komiya Shunsuke(小宮信介)
Kondo Soichi/Mitsuko(近藤壮一/みつ子)
Kong Guan Wie(江元偉)
Kong Kwee Song(江回松)
Kong Sian Shih(江幸柿)
Konno Takamitsu(金野隆光)
Kono Osamu(河野修)
Korematsu Kyoji(是松恭治)
Kornkeo Praisontarangkul
Koshiba Naoki(越場直樹)
Kraisorn Throngnymchai
Krisada Visavateeranon
Kubo Tetsuya(久保哲也)
Kuboki Yuichiro(久保木裕一郎)
Kudo Hidemi(工藤英弥)
Kudo Masashi(工藤正司)
Kudo Mikio(工藤幹雄)
Kumazawa Toshikazu(熊澤敏一)
Kurabe Kinuyo(倉部絹代)
Kurauchi Noritaka(倉内憲孝)
Kurihara Shizuko(栗原静子)
Kuroda Kazuo(黒田一雄)
Kuroha Hiroshi(黒羽宏)
Kutsuma Yuko(久津間優子)
Kyoto Electric Wire (Thailand) Co., Ltd.

L

Lai Yoon Poh(賴永保)
Lau Kai Soon, Arimura(劉・有村開順)
Lau Kok Yong(刘国栄)
Lau Sau Hong(劉少峰)
Lau Shiang Horng
Lau Weng Wah(刘润华)
Le Quynh Chi
Lee Check Poh(李志保)/Ng Sui Ying(黄瑞英)
Lee Chee Heong(李志雄)
Lee Chun Li(李春利)
Lee Kian Ling(李健睿)
Lee Kong(李廣)/Lam Chok Yak
Lee Leong King(黎亮景)
Lee Li Soon
Lee Liong Mui
Lee Miow Ying(李妙英)
Lee Mow Tiam(李茂添)

Lee Shu Wei(李淑維)
Lee Tee Boon(李智文)
Lee Tiam Hing(李天興)
Lee Yuet Keong(呂月強)/Kek Sai Fong(郭思坊)
Leong Khee Hoo(梁其和)
Leong Thiat Eng(梁德栄)
Leong Wing Sum(梁永森)
Leung Chi Shun (梁志順)
Lew Kim Song(劉金雄)
Li Chen Xi(李晨曦)
Li Hui Chun(李惠春)
Li Yan(李焱)
Liang Teck Meng, YB (梁德明)
Liao Wan Shu (廖婉淑)
Liau Kok Wee
Liaw CK(廖俊光)
Liew Teck Boon(劉德文)
Lim Bok Hek(林木火)
Lim Chee Tian(林志田)
Lim Chin Ee(林振意)
Lim Chin Kok(林振國)/ Fong Lin AU Yong
Lim Chong Chan(林忠贊)
Lim Guat Chiou(林月秋)/Fu Liang(傅亮)
Lim Hock Lai(林福来)
Lim Liong Chu(林良住)
Lim Peng Jin(Scientex Japan Co., Ltd.)
Lim Sin Yean(林欣燕)
Lim Soon Hang(林順桁)
Lim Suat San(林雪珊)
Lim Thian Huat(林天发)
Lim Yok Chai(林意財)
Lim May Yan
Lin Pi Chi(林丕継)
Liu Li Mei(劉麗美)
Liu Ming Hua(劉明華)
Liu Ying Chun(劉映春)
Liu Yue(劉越)
Loh Kok Choon(羅国俊)
Lock Hon Yee(陸漢宇)
Low Cho Kee(刘助基)
Low Han Peng(刘汉平)
Low Kim Lee(劉金莉)
Low Leong Meng(羅亮明)
Lu Xin Yi(呂新一)/He Pin(可頻)
Lupeichun Japan Education Centre (陸培春留日センター)
Lwee Lew Chen(雷柳菁)
Lwee Yuen Chiang(雷远江)
Lwee Yuen Tung(雷远东)

M

M. Ramamurthy
Machida Keiko(町田恵子)
Machida Wataru(町田航)
Maki Mihoko(牧美保子)
Maki Misao(槇操)
Malaysian student volunteers residing at ABK[ABK 在館マレーシア留学生有志(2012)]
Maliwan Dejaritt
Mano Steel Co., Ltd.
Manoo Nakalasin
Marcia Ogawa Matsubayashi
Masuda Cho/Yoshiko(増田澄/芳子)
Masugi Eiichi(馬杉栄一)
Matsudaira Yoshiyo(松平吉世)
Matsui Masae(松井正枝)
Matsuoka Hiroshi(松岡弘)
Matsushima Takeji(松島武司)
Matsuzaki Shohei(松崎松平)
Mayama Shizuko(眞山静子)
Mayumi Makoto (真弓忠)
Meena Thamchaipenet
Mendoza Shimada Olga Keiko
Meng Ling Hua(孟令樺)/Ji Yu Sheng(計宇生)
Meng Xiao Xiao(孟瀟瀟)
Miyanoo Mitsumasa(宮野尾光正)
Miyashita Hiromichi(宮下偉路)
Miyauchi Shunji(宮内俊治)
Mizoue Yasuko Shogaku Kikin (溝上泰子奨学基金)
Mizuno Nobuaki(水野伸明)
Mizusu Yoshiyuki(水須善幸)
Mizuta Yasuhiro(水田康広)
Mongkol Pianapitham
Morio Masateru(森尾正照)
Morishita Akiko(森下明子)
Morishita Haruyuki(森下治幸)
Motoki Tomoko(本木兼子)
Mudhafar Al Jabiri
Munthanee Buranakate
Murata Tadayoshi(村田忠蒲)
Murayama Hideo(村山秀男)

N

Na Chin Teong(藍振忠)
Nakahara Kazuo(中原和夫)
Nakahata Masaki(中畠正喜)
Nakajima Gengo(中島源吾)
Nakamoto Sugane(中元菅根)
Nakamura Yoichi(中村洋一)
Nakano Masaaki(中野正明)
Nakasone Makoto(中曽根信)
Natedao Adisornpankul
Navarat Srisuponvanit
Negishi Sachiko(根岸幸子)
Nelson Yamakami
Ng Chee Meng
Ng Chin Keong(黄振强)
Ng Chuan Aik(黄泉誠)
Ng Eng Hooi(黄永輝)
Ng Kim Chai(黄金財)
Ng Mee Wah(吳剣華)
Ng Teong Guan(黄忠元)
Ng Thian Eng(黄殿英)
Ngampho Pattrawut
Ngiam Tee Seng(嚴世清)
Nguyen An Trung
Ngwan Boon Ming(阮文明)
Ni Yu(倪玉)
Nihon Yosei Gakkai(日本養生学会)
Niramai Thanatavee
Nishida Sachiko(西田祥子)
Nishigaki Tadatomo(西垣宰朋)
Nishihara Keitetsu(西原景哲)
Nishihara Shoichi(西原彰一)
Nishijima Katsuhiko(西嶋勝彦)
Nishikawa Megumi(西川恵)
Nishimoto Kaji(西本梶)
Nishimura Kiyoto(西村清人)
Nishitani Takayoshi(西谷隆義)
Niti Siripitakchai
Nitta Hiroko(仁田裕子)
Nitta Nobuko(新田宣子)
Noda Harumi(野田春美)
Noguchi Akemi(野口明美)
Nomura Michiko(野村美知子)

O

Odanaka Toshiki(小田中聰樹)
Ogawa Iwao(小川巖)
Ogawa Teruo(小川輝夫)
Ogino Masaaki(荻野正明)
Ogiso Hiroshi(小木曽大)
Ogiso Ken(小木曽建)
Ogiso Yu(小木曽友)
Ogura Hisako(小倉尚子)
Oh Bum Suk(吳範錫)
Ohara Masatoshi(小原正敏)
Ohnishi Hiromu(大西博巳)
Okuyama Setsuko(奥山節子)
Okuyama Yoshio(奥山義夫)
Okabe Yoichi(岡部洋一)
Okazaki Michiko(岡崎道子)
Old Japan Students' Association, Kingdom of Thailand
Ong Cheng Chuan(王清川)
Ong Cheng Han(王清漢)
Ong Ching Long(王建龍)
Ong Chooi Lee(王翠莉)
Ong Huat Kee(王発斌)
Ong Poh Heng(王宝慶)
Ong Thye Beng(王泰明)
Ong Wei Bing
Ong Yee Meng(王王明)

Onodera Takeo(小野寺武夫)
Onosato Mitsuhiro(小野里光博)
Onozaki Tadashi(小野崎忠士)
Ooki Naomi(大木直美)
Ookoshi Hideo(大越英男)
Ookubo Nobue(大久保伸枝)
Ookubo Tomoko(大久保とも子)
Oomura Hikaru(大村光)
Oonishi Ichiro(大西一郎)
Oono Daihei(大野大平)
Oosato Hiroaki(大里浩秋)
Oosawa Ryu(大澤龍)
Ooshima Masako(大島雅子)
Ooshima Mitsue(大島光恵)
Oosuka Toshiharu(大須賀稔晴)
Oosugi Ryu(大杉立)
Ootani Rieko(大谷理恵子)
Oshidari Emi(忍足絵美)
Oshidari Mari(忍足眞理)
Oshidari Rinki/Mieko(忍足林基/美恵子)
Ou Yang Fei(欧陽菲)

P

Pang Choon Boon(彭俊文)
Pang Pow Kwee(方宝貴)
Pang Yuet Hueng(彭月紅)
Paradee Bhovichitra
Park Hyang Sook(朴香淑)
Participants at the alumni reunion party of Japanese university graduates of Malaysia [マレーシア留日学生同窓会パーティー参加者一同(2011/11/12)]
Patamavadee (Vongsayan) Narciso
Permsak Phatipipat
Petrothai Corp. Ltd.
Phang Siew Kiong(彭修强)
Phattaraporn Thadsanasevee
Phiphat/Suvaree Chaichanavichakij
Pholchai Limviphuvadh
Piao Shun Yu(朴順玉)
Pilaipan Mekaratana
Pimon Jaroonwongniramon
Pimpilai Lertphaiboon
Pinitara Patanabhiboonchai
Pisan Thanatavee
Poh Siew Hui(傅秀慧)
Pornpen Namwong
Pornanong Niyomka H.
Prayad Kongkasawad
Prayoon Shiowattana
Puah Chin Chye

Q

Quah Saw Ting(柯素珍)
Quah Soh Teah(柯素綻)
Quan Hao(全浩)

R

Ratinuch Kawnachaimongkol
Renu Kitkasem
Rokumonkai(六文会)
Ronald Chao Kee Yong(曹其鏞)
Roongrasamee Mecksakul
Run Bunyatsinee

S

S.Udomsak Metal Gearing Co., Ltd.
Sadakane Bussan Co. Ltd.貞包物産(株)
Sai Ooi Poh
Saiki Fumi(斉木史)
Saito Masashi(斉藤雅史)
Saito Michiko(斎藤美知子)
Saito Yasuko(齋藤やす子)
Sakai Yoro(酒井吉郎)
Sakaki Tadayoshi/Masako(榊正義/正子)
Sakamaki Ayano(酒巻彩乃)
Sakamoto Hiroko(坂元ひろ子)
Sam Cha Peng(覃澤平)
Samizo Koetsu(三溝弘悦)
Sang Charoen Tools Center Co., Ltd.
Santrek Oulapathorn
Saotome Kazuyoshi/Hiroko(早乙女和義/博子)
Saowanee Patrakarn
Sasipim Pimpisen
Sathida Mekaratana
Sato Ikuo(佐藤郁夫)
Sato Junko(佐藤順子)
Sato Masabumi(佐藤正文)
Sato Rei(佐藤玲)
Sawanobori Chieko(澤登千恵子)
Sawanobori Haruo(澤登晴雄)
Seah Boon Chieng(謝文清)
Seki Masaaki(関正昭)
Sekiya Tachibana
Sersh Sershdhaviravat
Sha Liang Xiang(沙蓮香)
Shang Jie(尚捷)
Shia Wei Jong(佘維忠)
Shibata Tamotsu(柴田保)
Shibuya Yasunobu(渋谷寧伸)
Shigeno Yukiko(重野幸子)
Shimizu Kunio(清水国夫)
Shimizu Yuji/Yasuyo(清水勇治/泰代)
Shimomura Yasuaki(下村安秋)
Shinotsuka Keiichi(篠塚景市)
Shintaku Hikaru(新宅光)
Shiraishi Katsumi/Anchalee(白石勝己/アンチャリー)
Shiraishi Kazuya(白石和也)
Shiraishi Tsutomu(白石勤)
Shiratori Ayako(白鳥文子)
Shirota Yasuhiko/Masuyo(代田泰彦/ますよ)
Shobi Gakuen Daigaku Kokusaikoryu Center (尚美学園大学国際交流センター)
Sia Ooi Poh
Siau Fook Siong(蕭福祥)
Siew Kooi Kam(蕭衍金)
Siew Moey Yen
Siew Soke Lee
Sim Ee Looi
Sim Eng Kang(沈永江)
Sim Kee Hong(沈其豊)
Sim Kim Ling
Simon Liow(廖天報)/Ho CL(何俐伶)
Sivaporn Sirilatthayakorn
SKK Kaken (M) Sdn Bhd
Soh Keh Woei(蘇克偉)
Someya Kimihisa(染谷公久)
Someya Makoto(染谷誠)
Somjai Chucherwatanasak
Somkit Naksinehapon
Somsri Junhasavasdikul
Sone Fumiko(曾根文子)
Soneiji(總寧寺)
Soo Ka Jin(蘇克敬)
Soo Kee Chee(蘇克智)
Soo Seck Heng(苏锡兴)
Soon Kian Seng(孫健勝)
Soon Sai Kheng(宋世勤)
Stanley Lian
Su Kui Sheng(蘇桂昇)
Suchai Pongpakpien
Sucharit Koontanakulvong
Suchittra Hunbuncharkit
Sugawara Teruyo(菅原照代)
Sugimoto Hiroki(杉本宏樹)
Sugiura Yuki Kinen Ajia Kyoiku Kikin (杉浦ゆき記念アジア教育基金)
Sugiura Kiwako(杉浦貴和子)
Sugiyama Ken-ichi(杉山健一)
Suhara Satoru(栖原暁)
Sui Kwai Chan
Sumipol Co., Ltd.
Sumitomo Electric Group in Thailand
Sun Qian Jin(孫前進)
Supoj Watitapun
Supong/Niramol Chayutsahakij
Surasri Limsiriwong
Suthee Chutchaiwett
Suvit Vibulsresth
Suzuki Shigeru(鈴木繁)
Suzuki Shumei(鈴木秀明)
Suzuki Satoshi(鈴木智)
Suzuki Yaeko(鈴木八重子)
Suzuki Yoriko(鈴木順子)

T

Tagawa Akiko(田川明子)
Taguchi Kumiko(田口久美子)
Taguchi Masako(田口昌子)
Tai Anh Tien
Taiwanese student volunteers residing at ABK(ABK 在館台湾留学生有志)
Tajiri Eizo(田尻英三)
Takado Toshihiko(高道俊彦)
Takagi Keiko(高木桂子)
Takahashi Kikue(高橋喜久江)
Takahashi Mitsuru(高橋満)
Takahashi Sakutarao(高橋作太郎)
Takahashi Yukie(高橋幸枝)
Takahashi Yuzo(高橋雄造)
Takano Yasuko(高野靖子)
Takayanagi Naomasa(高柳直正)
Takebayashi Nobutada(竹林惟允)
Takeda Hajime/Kazuko(竹田肇/和子)
Takeshima Toshiki(竹嶋俊紀)
Takuma Tadasu(宅間董)
Tamori Chieko(田守智恵子)
Tan Ai Lak(陳愛麗)
Tan Boon Liang(陳文亮)
Tan Chaik Kwang(陳澤光)
Tan Chee Kiong(陳志強)
Tan Chee Teong(陳治中)
Tan Chew Mooi(陳秋妹)
Tan Choon Shian
Tan Hwee Ing
Tan Keah Moh(陳佳茂)
Tan Kee Hang(陈继汉)
Tan Pang Tee(陈邦智)
Tan Peck Ming(陳碧明)
Tan See Seng(陳時生)
Tan Soo Sing(陳素芯)
Tan Wee Pin(陳為彬)
Tan Wee Seng(陈为胜)
Tana Tangtrongsakdi
Tanaka Chikako(田中千佳子)
Tanaka Koji(田中公治)
Tanaka Masayuki(田中雅幸)
Tanaka Michiko(田中美智子)
Tanaka Rieko(田中利恵子)
Tanaka Shin-ichiro(田中紳一郎)
Tanaka Tamiko/Takeo(田中多美子/武雄)
Tanaka Toshiko(田中稔子)
Tanaka Yoichi(田中洋一)
Tang Cheet Yong(唐志勇)
Tang Eng Huat(陳永発)
Tang Gek Eng(陈玉英)
Tang Kok Lian(湯国亮)
Tang Miow Chin(湯妙晶)
Taniguchi Tetsuo(谷口哲雄)
Tanioka Kazuya(谷岡一也)
Tay Kiam Guan(鄭謙源)
Technology Promotion Association (Thailand-Japan)(TPA:泰日経済技術振興協会)
Tee Chong Hong
Tee Kian Meng
Teh Chong Yee(鄭忠義)
Teii Shinriki(堤井信力)
Teng Kim Yin(鄧錦雲)
Teo Bee Hong(張美宏)
Teo Boon Lian(張文連)
Teo Chuan Soon(張川順)
Teo Kian Song
Teo Kim Chuan(張晋銓)
Teo Kwee Swee(张贵水)
Teo Tiam Hwa(張添華)
Teoh Eng Chooi(張映水)
Teoh Eng See(張映絲)
Terakado Katsuro(寺門克郎)
Terao Yasutaka/Mieko(寺尾方孝/三枝子)
Terasawa Koji(寺沢宏次)
Tey Khern(郑勤)
Tey Kian Teong(鄭建忠)
Thai City Electric Co., Ltd.
Thai Mari(田井満里)
Thai Masterpack　Co., Ltd.
Thai-Nichi Institute of Technology (TNI:泰日工業大学)
Thai Ryokichi(田井亮吉)
Thai TOYO Rubber Co., Ltd.
Thai Vegetable Oil Public Co., Ltd.
Thai Wire Products Pubilc Co., Ltd.
Thai Yamaha Motor Co., Ltd.
Thai Yoshitomo(田井良知)
Tham Kok Who
Thanakrit Kosonsittiwit
Thanarak Phongphatra
The Association for Overseas Technical Scholarship, Bangkok Office
The Pathumthani Concrete Co., Ltd.
The Quality Wire Co., Ltd.
Thye Meng Yu(鄭茗友)
Tian Sew Ming
Tiang Chuan Seong(鄭俊雄)
Thienwannee Chaengyu
Threenuch Kientong
To Buu Luong
Toda Kiyoshi(戸田清)
Toh Leong Chee(卓良志)
Toh Peng(杜平)
Tokita Jun-ichi/Yumi(鴇田純一/由美)
Tokyo Kakyo Sokai(東京華僑総会)
Tomioka Shojiro(富岡正二郎)
Tomooka Tizuko
Toray Group Companies in Thailand
Toyama Kyoko(外山経子)
Toyoshima Yoshihisa(豊島由久)
Tran Thanh Viet
Tsuchiya Motoko(土屋元子)
Tsuchiya Sachiko(土屋幸子)
Tsukamoto Hideyuki(塚本秀幸)
Tsukiyama Junko(築山淳子)
Tsukuda yoshikazu(佃吉一)
Tsuruo Yoshiko(鶴尾能子)
Tsutsumi Yuko(堤祐子)

U

Uchiyama Atsuyuki(内山敦之)
Udo Seiji(宇戸清治)
Ue Takako(上高子)
Ueda Nao(上田菜生)
Ueda Yasufumi(植田泰史)
ULTIMA Co., Ltd.
Unemoto Shosuke(畝本昌介)
Ung Yat Keat
Urushima Saiko(漆嶌才子)
Uzaki Masao(宇崎雅雄)

V

Vachiranee Limviphuvadh
Vachiraporn Limviphuvadh
Vilai Tomorakul
Virat Thiravathanavong
Volunteer Malaysian alumni of ABK Japanese Language School(元 ABK 日本語学校マレーシア卒業生有志)
Volunteer participants at the ABK Japanese Language School graduation party[ABK 日本語学校卒業パーティー参加者有志(2013/3)]

W

Walalak Sershdhaviravat
Wang Wei(王巍)
Wang Wen(王稳)
Wannadee O'sorup
Watanabe Joji(渡辺穣二)
Watanabe Masago(渡辺真砂)
Wei Qing Ding(魏慶鼎)
Wijit Mecksakul
Wilai Tangkaravakoon
Wiraphot Lueprasitsakun
Wiroj Wongthonglua
Wiwut Tanthapanichakoon
Wong Chao Hsiung(黄超雄)
Wong Chee Ken(黄啓耕)
Wong Chin Shiuan(黄晋軒)
Wong Choon Leng(黄俊霖)
Wong Fee Ping(黄慧萍)
Wong Jiunn Shyong
Wong Ka Seng(王家成)
Wong Kim Choy(黄金財)

Wong Kok Hoi
Wong Kuok Hung(黄國鳳)
Wong Mei Kin
Wong Meng Quang(黄名光)
Wong Seng Keng(黄成耕)
Wong Sheong Chin(黄鋒进)
Wong Tzong Chyang(黄宗強)
Woo Su Keun(禹守根)

Y

Yabushita Masaru(藪下勝)
Yamada Ken-ichi(山田健一)
Yamada Morikazu(山田守一)
Yamada Hiroko(山田裕子)
Yamagata Misa(山縣みさ)
Yamaguchi Makoto(山口誠)
Yamaguchi Noriaki(山口憲明)
Yamakawa Hayato(山川勇人)
Yamamoto Hitoshi(山本斉)
Yamamoto Izuru(山本出)
Yamamoto Shoji(山本章治)
Yamane Yukihiro(山根行弘)
Yamanoi Akio(山野井昭雄)
Yamanouchi Masahiko/Hagiko (山之内正彦/萩子)
Yamashita Yasunori(山下靖典)
Yamauchi Atsushi
Yamauchi Kazuhiro(山内一弘)
Yamauchi Kazuko
Yamaumi Tamotsu(山海保)
Yamazaki Mitsuo(山崎光郎)
Yan Hao(嚴浩)
Yanase Shuzo(柳瀬修三)
Yang Yi Fan(楊一帆)
Yap Geng Yi(叶耿瑜)
Yap Men Fatt(葉明発)
Yap Shin Woei(葉信偉)
Yeung King Hong(楊経航)/Tsai ChinYen(蔡金燕)
Yew Kuen Ying(姚群英)
Yew Siew Leong(姚瑞良)
Yi Ko Marketing & Enterprise
Yoda Yoshiko(依田良子)
Yokoyama Masayuki(横山昌幸)
Yokozawa Kikuko(横澤喜久子)
Yong Cheng Yuen(楊青雲)
Yong Chin Chew(楊清洲)
Yong Hon Wee(楊漢威)
Yong Hwee Yan
Yong Kian Teck(杨建德)
Yong Kok Lin(楊國林)
Yoshida Hiroko(吉田裕子)
Yoshida Naoko(吉田葉穂子)
Yoshihara Etsuko(吉原エツ子)
Yoshihara Hideo(吉原秀男)
Yoshikawa Eiichi(吉川英一)
Yoshiko Limviphuvadh
Young Seong Kook(尹誠國)/ 崔銀珠
Yuyama Kayo(湯山佳代)

Z

Zhan Xin(張新)
Zhan Xin Wang(張新旺)
Zhang Hang(張航)
Zhang Jian Min(張建敏)
Zhang Yong(張勇)
Zhou Xiang(周翔)/Huang Yi(黄軼)

5 anonymous contributors (匿名希望 5 件)

Total amount of contributions(寄付金総額)
: 58,329,125 円
Country/regions of origin of contributors(寄付者の国・地域内訳):
Bangladesh(バングラデシュ)、Brazil(ブラジル)、Cambodia(カンボジア)、Canada(カナダ)、China(中国)、Germany(ドイツ)、Hong Kong(香港)、India(インド)、Indonesia(インドネシア)、Iraq(イラク)、Japan(日本)、Korea(韓国)、Laos(ラオス)、Malaysia(マレーシア)、Myanmar(ミャンマー)、Pakistan(パキスタン)、Peru(ペルー)、Singapore(シンガポール)、Sri Lanka(スリランカ)、Taiwan(台湾)、Thailand(タイ)、U.S.A.(アメリカ)、Vietnam(ベトナム)
The above total number of 1,020 contributions have been received from alumni, advocates and organizations from 23 countries and regions.(以上、23 カ国・地域の同窓生、賛同者、団体の皆様より、計 1,020 件のご寄付をいただきました。)

上記銘板は、2013 年 3 月に竣工した（学）ABK 学館日本語学校入口右側の壁に掲示されています。ご来館の節にはぜひお立ち寄りください。

知友会通信
CHIYU KAI TSUSHIN

イベント情報

江ノ島アジア映画祭のご案内　＜2014 年 2 月 2 日（日）＞

内　容：●映画「星空の下で」～ 1 万 4 千余の島からなるインドネシアの、ひとつの島のとある家族の物語～＜インドネシアの貧民地区に暮らす家族を 12 年間追い続けた三部作の完結編。両親を亡くし叔父一家と暮らす孫娘を訪ねて田舎から出てきた祖母を中心に、定職がなく闘魚に興ずる叔父とそれを嘆く妻との夫婦喧嘩、反抗期を迎えた孫娘の大学進学問題などがテンポよく映し出される。＞1 回目 11:00 ～　2 回目 14:30 ～　●ハーフタイムショー 13:30 ～　インドネシア舞踊、ガムラン生演奏とバリ舞踊の上演　●インドネシアグッズコーナー 10:00 ～　インドネシア屋台、輸入食材、クバヤ（民族衣装）、雑貨　●バリ島体験コーナー

会　場：神奈川県立かながわ女性センター ホール〔藤沢市江の島 1-11-1　TEL 0466-27-2111〕

主　催：江ノ島アジア映画祭実行委員会　TEL: 090-6020-3769　E-mail: enoshimaeiga@live.jp

「外国人留学生のための就活ガイド」発行のご案内

日本学生支援機構では毎年、外国人留学生が日本で就職活動をするために必要な情報を満載したガイドブックを無料で配布しています（送料のみ自己負担）。2015 年版では、就職活動の準備から、エントリー、採用試験、在留資格の変更等、活動の時期に応じて必要な情報を分かりやすく解説しています。

独立行政法人日本学生支援機構 留学生事業部交流・宿舎事業課

Tel 03-5520-6030　ホームページ www.jasso.go.jp/job/guide.html

MEMBERS

〈会費とご寄付の報告〉

2013 年 8 月
（前号未掲載分）

特別会員

（3 口）
（一財）海外産業人材育成協会　足立区

2013 年 10 - 11 月

特別会員

（1 口）
張 瑞騰　台湾

賛助会員

（1 口）
雅留宮 久麿／澄子　野田市
東洋パーツ（株）　秩父郡

正会員

（2 口）
石川 毅／優子　北区

（1 口）
永井 マス子　川崎市
呂新一 / 可頻　中央区
山口 誠　吾妻郡
対馬 節子　品川区
佐藤 和江　揖斐郡
中島 明彦／絢子　横須賀市
清水 恭子　練馬区
平田 熙　松戸市
鈴木 順子　須賀川市

ご寄付

秦 和子　大田区
築山 淳子　文京区
張 素華　カナダ
田中 美智子　市川市
山崎 博康　浦安市
栗原 静子　気仙沼市
西本 梶　横浜市
齋藤 美知子　富里市
山崎 光郎　横浜市

皆様の暖かい御支援に感謝申上げます

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名　称：財団法人アジア学生文化協会
ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOSIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長　小木曽　友

設　立：1957年（昭和32年）9月18日
故穂積五一氏創設

目　的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

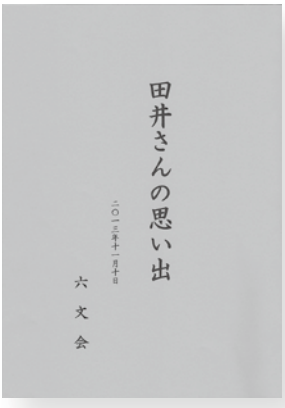
◇主な事業◇

(1) 留学生宿舎の運営
(2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
(3) 留学生に対する情報提供支援
(4) アジア語学セミナー
(5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、（社）日・タイ経済協力協会、ＡＢＫ留学生友の会との連携・協力

◇会費（年額）◇

正会員　　1口　1万円
賛助会員　　1口　5万円
特別会員　　1口　10万円
会員には広報誌「アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間３千円（学生２千円）でお送りしています。

本誌で広告してみませんか。
団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。



2013 年 11 月、六文会が文集「田井さんの思い出」（B5 版 48P）を発刊しました。非売品ですが、￥５００でお分けいたします。ご希望の方は下記までご連絡ください。

☎　03-3946-4121
Fax 03-3946-7566
e-mail　asca50com@abk.or.jp
（担当：布施）

後 記

前回（2013年10-11月号：第505号）から当機関誌の表紙の題字「アジアの友」の書体が変わったことに気づかれた方はどのくらいおいでになるのか気になるところである。「アジアの友」は長い間深緑色の枠に白抜きでこの文字が表紙を飾っていたのを覚えているだろうか（第33号～第261号）。1958年の「アジアの友」創刊時、穂積先生に揮毫してもらったものである。本誌500号記念号で田中宏さんが「…、現在は中扉に入っている先生の揮毫を表紙に登場させ、それが穂積先生のものであることをどこかに掲げてほしい」と述べています。また、今夏、12年振りに突如ABKを訪れたカナダ在住の同窓生 、張素華さん（中国・上海出身）が、日本を離れる前に再度会館を訪れ、「穂積先生のこの字をぜひ表紙に使って下さい」と言いおいていった。2回目このことを言うためだけの来館である。編集部としても心を動かされた。新たな旅立ち、学校法人ABK学館日本語学校設立記念式典の報告掲載号に合せ表紙の題字を先生の揮毫に変えた。（F）

同窓生の座談、放談はいつも学ぶことが多い。多謝。学生時代のABKの自由な雰囲気が、何年経っても率直な話し合いの場を提供してくれるのか。ABKの伝統の重要な部分である。式典参加のために来日された方々は、各国、各地の第一線で活躍している元日本留学生。式典参加だけではもったいないとこの機に座談会を企画する。そこに、在日のOB/OGを加えての座談会で、参加者多数の座談になったため、時間の制限もあり１人１回の極々限られた発言になってしまったのが残念だが、それでも日本人には決して見えない、感じられない発言が飛び交っている。参加者は言い足りないことが多々あったのではないかと、心に残る。ぜひご一読を。（F）

アジアの友　2013 年 12 月号 - 2014 年 1 月号

2013 年 12 月 20 日発行（通刊第506号）
年間購読（送料共）3,000円（学生2,000円）　1部 500 円（税込）

発 行 人　小 木 曽　友
編　　集　アジアの友編集部
発 行 所　財団法人　アジア学生文化協会
東京都文京区本駒込2 —12 —13（〒113-8642）
電話番号 ：　03 - 3946 - 4121　　ファクシミリ：　03 - 3946 - 7599
振替口座 ：　00150 - 0 - 56754　　E-mail：tomo@abk.or.jp
ホームページ：（http://www.abk.or.jp/）

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)
2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN
☎+81-3-3946-4121 ℻+81-3-3946-7599
Email : tomo@abk.or.jp
Home Page : http://www.abk.or.jp/

「アジアの友」の購読会員（年3,00 0円・学生2,000）にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。

学校法人 ABK 学館

ABK学館日本語学校

所 在 地　〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-12
電話番号　+81-3-6328-3428　　F A X　+81-3-6328-3393
U R L　http://abk-college.com　　E-mail　college@abk.or.jp

- 留学生の絆が作る日本語学校 -

ABK学館日本語学校（英語名称：ABK COLLGE）は1957年に設立された財団法人アジア学生文化協会で寮生活や日本語を学習した留学生、そして多くの関係者のご寄付と献身的な協力により、学校法人による日本語学校として2014年4月に開校します。当校には姉妹校のABK日本語コース(財団法人アジア学生文化協会)もあり各種協力を行います。

授業風景イメージ

寮の一例

ABK日本語コース　　ABK COLLEGE

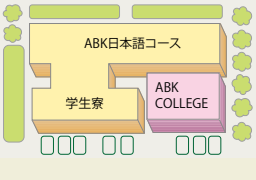
ABK COLLEGE (学校法人ABK学館 ABK学館日本語学校)
東京都認可日本語課程(大学院・専門学校・就職・文化体験等)

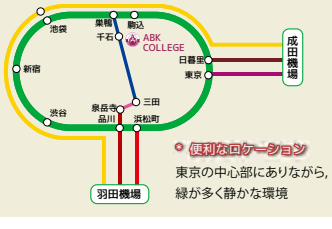
4月 1年コース	860時間/1年	入学検定料	20,000円
		入 学 金	80,000円
		授業料(施設・教材費含む)	620,000円

姉妹校 ABK日本語コース (財団法人アジア学生文化協会)
文部科学省指定大学進学準備教育課程

4月 1年コース	1086時間/1年	入学検定料		20,000円
		入 学 金	大 学 進 学 日本語課程	80,000円
			大学進学 準備課程	95,000円
10月 1.5年コース	1586時間/1.5年	授 業 料 (施設・教材費含む)		720,000円(1年) 1,080,000円(1.5年)

所在地：〒113-8642東京都文京区本駒込2-12-13　　U R L：http://abk.or.jp
電　話：+81-3-3946-2171　F A X：+81-3946-7599　　E-mail：nihongo@abk.or.jp





便利なロケーション
東京の中心部にありながら、緑が多く静かな環境